

2024

人間科学研究科教員が

薦める

「私の一冊」

人間科学研究科教員が薦める
「私の一冊」

2024

はじめに

書物が消滅することを心配する声もあります。しかし書物が出来上がるまでに費やされる思考と労力はオンライン上のテキストとは比較になりません。書物においては、著者の練り上げられ推敲された思惟が、編集者などの他者の批評眼によって鍛え上げられています。この思考と労力の蓄積と凝縮ゆえに繰り返し繰り返し読むに耐えるテキスト、これが書物です。新しい思考を生み出すための土壌としてこのような書物は人類にとってこれからも不可欠のものでありつづけるでしょう。

(センター長 村上 靖彦)

私たちの人間科学部・研究科には、人文・社会科学から理系分野まで、あるいは主な研究場所が大学の実験室から学外の多様な人の集まり、村から大都市、そして、日本だけでなく海外まで、しかも、人だけでなくヒト以外の動物までを研究対象とする教員、研究者が集まっています。これは、1972 年の人間科学部創設以来、「深い専門性」と「豊かな学際性」を大事にしながら、教育・研究を進めるためには、とても大事なことでした。

(初代センター長 中道 正之)

私は、「学び」は「遊び」に似ていると感じています。自発性そして探究心があるペースにあること、学びの本質はそこにあります。この冊子を片手に、自由に人間科学の世界を飛翔してください。人間科学の未来を開いていくのは、皆さん一人ひとりです。

(2 代目センター長 志水 宏吉)

数千年前から、書物は私たちの人生の羅針盤であり、伴侶であり、揺り籠でもありました。さまざまな情報媒体があふれるこの時代にあっても、書物がもつ魅力と力は健在であると思います。この冊子は、大阪大学人間科学部・人間科学研究科に入学される学生みなさんに、私たち教員がぜひとも読んでいただきたいと考える書物を紹介するものです。いわば、教員自身の人生の一片をここに込めていると言えます。冊子にこめた先人の思いを引用しながら、この冊子がこれからの大学生活のみなさんの最初の糧になることを願ってやみません。

(3 代目センター長 山中 浩司)

目 次

「私の一冊」－人間科学研究科教員が薦める本－

() 内は推薦者氏名

岩宮 真一郎 『音の生態学 ―音と人間のかかわり―』	(青野 正二)	1
スタンレー・ミルグラム 『服従の心理』	(渥美 公秀)	3
内田 義彦 『読書と社会科学』	(荒牧 草平)	5
中井 遼 『欧州の排外主義とナショナリズム ―調査から見る世論の本質―』	(五十嵐 彰)	7
金菱 清 『震災メモメントモリー 第二の津波に抗して』	(稲場 圭信)	9
米沢 富美子 『「人生は、楽しんだ者が勝ちだ」私の履歴書』	(大谷 順子)	11
山名 淳 『「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ ―日常の「文明化」という悩みごと―』	(岡部 美香)	13
岡ノ谷 一夫 『さえずり言語起源論 ―新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ―』	(勝 野史子)	15
マイケル・トマセロ 『ヒトはなぜ協力するのか』	(鹿子木 康弘)	17
宮本 常一 『忘れられた日本人』	(河森 正人)	19
アリス・ウォーカー 『カラーパープル』	(北山 夕華)	21
エーリッヒ・フロム 『自由からの逃走』	(吉川 徹)	23
フリードリッヒ・エンゲルス 『家族・私有財産・国家の起源』	(木村 涼子)	25

金井 壽宏	『働くみんなのモチベーション論』	(後藤 崇志)	27
檜垣 立哉	『食べることの哲学』	(近藤 和敬)	29
アルヴァ・ミュルダール、ヴィオラ・クライン			
	『女性の二つの役割：家庭と仕事』	(斉藤 弥生)	31
ジャレド・ダイヤモンド著			
	『文明崩壊（上／下）：滅亡と存続の命運を分けるもの』	(佐伯 いく代)	33
青木 省三	『僕のこころを病名で呼ばないで』	(佐々木 淳)	35
松田 素二、津田 みわ 編著	『ケニアを知るための 55 章』		
		(澤村 信英)	37
クリストファー・チャブリス、ダニエル・シモンズ			
	『錯覚の科学』	(篠原 一光)	39
信田 敏宏	『ドリアン王国探訪記―マレーシア先住民の生きる世界』		
		(白川 千尋)	41
帯木 蓬生			
	『ネガティブ・ケイパビリティ―答えの出ない事態に耐える力』		
		(管生 聖子)	43
筒井 清輝	『人権と国家		
	―理念の力と国際政治の現実―』	(杉本 めぐみ)	45
エマニュエル・サンテリ			
	『現代フランスにおける移民の子孫たち		
	都市・社会統合・アイデンティティの社会学』	(園山 大祐)	47
角岡 伸彦	『はじめての部落問題』	(高田 一宏)	49

居場所カフェ立ち上げプロジェクト

『学校に居場所カフェをつくろう！

——生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』

(玉城 明子) 51

ピエール・ブルデュー

『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ —社会的判断力批判—』 (知念 渉) 53

ジョン・スチュアート・ミル 『自由論』 (辻 大介) 55

上橋 菜穂子(編著) 『狐笛のかなた』 (徳永 恵美香) 57

熊田 孝恒(編著) 『商品開発のための心理学』 (中井 宏) 59

ノーラ・エレン・グロース『みんなが手話で話した島』 (中井 好男) 61

ディヴィッド・スノウドン

『100歳の美しい脳

—アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち—』

(中川 威) 63

篠田 謙一 監修『ホモ・サピエンスの誕生と拡散』 (中野 良彦) 65

稲垣 佳世子、波多野 誼余夫

『人はいかに学ぶか—日常的認知の世界』 (西森 年寿) 67

金出 武雄 『独創はひらめかない—「素人発想、玄人実行」の法則』

(入戸野 宏) 69

永井 均 『マンガは哲学する』 (野尻 英一) 71

ジェローム・ブルーナー

『意味の復権—フォークサイコロジーに向けて—』 (野村 晴夫) 73

アーシュラ・K・ル＝グウィン 『ギフト 西のはての年代記Ⅰ』

(福岡 まどか) 75

西平 直 『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議、

死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議—』 (藤川 信夫) 77

山田 風太郎 『人間臨終図巻 1〜4<新装版>』	(三浦 麻子)	79
上野 英信 『地の底の笑い話』	(宮本 匠)	81
ピエール＝ジル・ドジェンヌ		
『科学は冒険！一科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ』	(三好 恵真子)	83
上間 陽子 『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』	(村上 靖彦)	85
Hugh Raffles 『Insectopedia』	(森田 敦郎)	87
リチャード・E・ニスベット		
『木を見る西洋人 森を見る東洋人:思考の違いはいかにして生まれるか』	(安元 佐織)	89
小林 朋道 『ヒトの脳にはクセがある―動物行動学的人間論』	(八十島 安伸)	91
長谷川 寿一、長谷川 眞理子 『進化と人間行動』	(山田 一憲)	93
中川 義信、森 合音		
『扉を開ければ見えてくる新しい病院のかたち』	(山中 浩司)	95
釘原 直樹 編集		
『スケープゴートィング―誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか』	(綿村 英一郎)	97

「自著を語る」ー人間科学研究科教員が著した本ー

() 内は著者名

『災害ボランティアー新しい社会へのグループ・ダイナミックス』

(渥美 公秀) 101

『水辺を活かす一人のための湿地の活用ー

(シリーズ水辺に暮らすSDGs 第2巻)』(太田 貴大) 103

『四川大地震から学ぶ

ー復興のなかのコミュニティと「中国式レジリエンス」の構築ー』

(大谷 順子) 105

『子育ても、キャリア育ても

ーウィズ/ポストコロナ時代の家族のかたちー』(大谷 順子) 107

『サッカーボールひとつで社会を変える』

(岡田 千あき) 109

『アメリカ創価学会における異体同心ー二段階の現地化』

(川端 亮・稲場 圭信) 111

『タイの医療福祉制度改革』

(河森 正人) 113

『The Politics of Police Detention in Japan:

Consensus of Convenience』(クロイドン シルビア) 115

『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する

ー〈内在〉の哲学試論』(近藤 和敬) 117

『「共生社会」と教育ー南アフリカ共和国の学校における

取り組みが示す可能性ー』(坂口 真康) 119

『こころのやまいのとらえかた』

(佐々木 淳) 121

『教師の社会学ーフランスにみる教職の現在とジェンダー』

(園山 大祐) 123

『岐路に立つ移民教育』	(園山 大祐)	125
『「かわいい」のちから：実験で探るその心理』	(入戸野 宏)	127
『見るだけで心が整う かわいい動物の写真』	(入戸野 宏)	129
『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』	(福岡 まどか)	131
『なるほど！心理学研究法』	(三浦 麻子)	133
『ACEサバイバー—子ども期の逆境に苦しむ人々—』	(三谷 はるよ)	135
『摘便とお花見 看護の語りの現象学』	(村上 靖彦)	137
『科学哲学講義』	(森田 邦久)	139
『法と心理学』	(綿村 英一郎)	141

ーシリーズ 人間科学ー

() 内は紹介者氏名

『シリーズ 人間科学』	(中道 正之)	145
『シリーズ 人間科学』 第一巻 「食べる」	(八十島 安伸)	147
第二巻 「助ける」	(渥美 公秀)	149
	(稲場 圭信)	
第三巻 「感じる」	(入戸野 宏)	151
	(綿村 英一郎)	
第四巻 「学ぶ・教える」	(中澤 渉)	153
	(野村 晴夫)	
第五巻 「病む」	(山中 浩司)	155
第六巻 「越える・超える」	(岡部 美香)	157
第七巻 「争う」	(栗本 英世)	159
第八巻 「住む・棲む」	(檜垣 立哉)	161

ー未来共創センター活動紹介ー

未来共創センター活動紹介

165

「私の一冊」
—人間科学研究科教員が薦める本—

「自著を語る」
—人間科学研究科教員が著した本—

—シリーズ人間科学—

—未来共創センター活動紹介—

「私の一冊」

—人間科学研究科教員が薦める本—

岩宮 真一郎

『音の生態学 ―音と人間のかかわり―』

(コロナ社 2000 年)

本書のタイトル“音の生態学”という表現には少し違和感を覚えるかもしれません。生態ということばは通常、生き物に対して使われますが、ここでは“音”、すなわちエネルギーの一形態によってもたらされる現象に対して使われています。わたしたちが日常耳にする音には、文明の発展に伴って生じた各種騒音、心癒やされる自然界の音（風、波、小鳥など）、季節ごとに行われる祭りの音、芸術としての音楽など、枚挙に暇がありません。このような音は、わたしたちが育んできた歴史、文化、伝統を反映するものであったり、あるいはそれらを聞（聴）いて何かを感じ取り、意義や価値を見いだしてきたものと考えられます。本書では、音をわたしたち自身によって意味づけられた存在として捉える、すなわち人間とのかかわりの中で捉えることで、“生態”ということばを用いています。この視点は、個々の音について、その音響的性質のみに基づいて議論する立場とは異なり、音を聞く主体としてのわたしたち自身の意識や行動に主眼を置いており、音響学においても比較的新しい流れであると言えます。

本書で述べられている具体的な内容（目次）としては、「サウンドスケープ・デザイン」、「音名所、残したい音風景、音環境モデル都市事業」、「都市公園で聞く音」、「歳時記に詠み込まれた日

本の音風景」、「外国人が聞いた日本の音風景」、「しずけさ考」、「音楽と映像のマルチモーダル・コミュニケーション」、「音と景観の相互作用」が取り上げられています。いずれの章においても、わたしたちになじみ深い事例が紹介されており、数は少ないものの必要に応じて調査・実験データも掲載されています。本書はいわゆる専門書というものではなく平易なことばで綴られていますが、音の背景にあるわたしたちの意識や行動を考える上で役立つ内容が盛り込まれています。

推薦： 青野 正二（准教授／行動学系）

スタンレー・ミルグラム

『服従の心理』

(河出文庫 2012 年)

本書は、権威に服従する人間の心理を科学的に追求した社会心理学の古典だとされます。巧妙に仕組まれた実験手続き、実験時の緊迫感、驚くべき結果、本書の面白さに感じ入って実験社会心理学の研究へと進むのも1つの可能性です。

しかし、本書を推薦する理由は、別のところにあります。本書を通して、大学での本の読み方（の1つ）を知ってもらいたいからです。まず、本に書かれていることを鵜呑みにせず、あちこちに疑問符をつける。小さなことでもいいので、気になることや問題を指摘する。そして、徹底的に批判してみる。その上で、どうすべきか自分なりに考え、友人や先輩に意見を求める。そうするうちに、次々と読みたい本や読むべき本に出会う。出会った本をまたじっくり読む。本書は、そんな読み方をしていく出発点となりえます。

「科学的な研究のためだといって人を騙すこと」は許されるのかという疑問を持つ人もいるでしょう。そこから研究倫理を学んでほしいと思います。そして、さらに批判的に考えてください。研究倫理とは単なる手続きのことでしょうか？そもそも倫理とは何でしょうか？研究するとはどういうことなののでしょうか？

「人間の心理をこうした『実験』によって『科学的に』追求することに意味や意義はあるのか」という疑問を持つ人もいるでしょう。

う。そこから科学について、また、実験的方法について学んでほしいと思います。そして、さらに批判的に考えて下さい。人間の心理は実験で明らかにできるのでしょうか？そもそも、心理とは何なのでしょう？ 実験とは、科学(的)とは？

さらに、本書の実験が「アイヒマン実験」と呼ばれていることに気づく人もいるでしょう。アイヒマンとは誰なのでしょう？ 実験の背景として、第2次世界大戦、ナチスドイツ、ユダヤ人といったキーワードが出てきます。そこから歴史をしっかりと学んでください。その時代、その現場で生きた人々に想いを馳せてみて下さい。アイヒマンについては、別の方法で吟味した人々もいます。関連する本や資料や芸術作品に食欲にあたってください。すると、本書がまた違った風に見えてくると思います。

主に災害の被災地に出かけ、被災地の方々や災害ボランティアの皆さんと一緒に実践し、研究を重ねています。災厄に襲われた人々と Living-together を目指す際、実験に意味はあるのでしょうか？どんな倫理的配慮をすればいいのでしょうか？ 現場の人々にとって意味と意義のある活動を積み重ねるためには、背景にある歴史、伝統、民俗、習慣、文化を深く知る必要があります。本書は、そうした実践・研究活動に向かう際に、(反面)教師の役割を担ってくれます。

推薦： 渥美 公秀（教授／共生学系）

内田 義彦

『読書と社会科学』

(岩波新書(黄版) 288 1985 年)

大学入試までの「国語」では、とにかく文意を正確に読み取ることに主眼がおかれていたと思います。その理解に基づいて、唯一の正解にたどりつけるように。ところが、大学に入った途端、そもそも唯一の正解などは存在しないことが宣言され、様々な文献についても内容を鵜呑みにするのではなく批判的に読むことが求められるようになります。しかも、そのやり方について手取り足取り教えてくれるわけでもない。そうした中、「一体、本って、どう読めばいいのだろう？」と思った方も少なくないのではないのでしょうか。このことについて、じっくり考えてみたいと思ったのであれば、うってつけの1冊であると思います。

本書は、執筆時、既に70代であった高名な経済学史家が、本を読むのは難しい、と言いながら、その方法について論じたものです。講演をもとにしており、全体を通して口語体で書かれていますので、その意味では非常に読みやすい本になります。ただし、長年の試行錯誤に裏付けられており、いわゆるハウツー本とはまったく趣が異なります。

学生時代、それこそ、どう読んだらよいかわからない難解な文献を前に四苦八苦しながら、仲間で集まって読書会をやったことがあります。ただ集まって、ああだこうだと、それぞれの見解を

披露し合っただけともいえ、「正しい理解」に近づいたのかどうかは心許ないですが、同じテキストに対して、自分とはまったく異なる見解に触れることができたので、少しでも視野を広げる助けにはなったかもしれません。

「新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくる」ように読むことを、本書では「古典として読む」とし、「情報として読む」とことと区別しています。そして古典としての読みを重ねながら、自前の「概念装置」を獲得することが著者の長年の悩みであり、本書の根底にある問題意識でもあります。そのための実践的な方法について初心者でもわかるように書かれた本とのことですが、冒頭は読書会のあり方から始まりますので、経験のない方にとっては、とっつきにくいかもしれません。しかし、経験がなくてわからない箇所は、そんなものと聞き流すつもりで読み進めていけばよいと思います。そして経験を積み、改めて読書や社会科学のあり方について考え直したいと思った時に読み直してみてください。

「本を読むことは大事ですが、自分を捨ててよりかかるべき結論を求めて本を読んじゃいけない。本を読むことで、認識の手段としての概念装置を獲得する。これがかなめです。」

推薦： 荒牧 草平（教授／教育学系）

中井 遼

『欧州の排外主義とナショナリズム』

—調査から見る世論の本質—

(新泉社 2021 年)

2015 年にはじまる欧州難民危機を背景に、ヨーロッパでは移民排斥を掲げる極右政党への支持が高まった。多くの研究が、どういった人がなぜ極右政党を支持するのかを分析してきたが、本書もこうした一連の研究群に位置する。特に、一般的によく言われている、貧困にあえぐ置き去りにされた人々が極右政党を支持しているという言説を検証し、経済要因以外の極右政党支持要因を突き止めているのが本書の内容だ。ヨーロッパの人たちを対象に実施した質問紙調査や実験といった豊富なデータをもとに統計分析を行っているが、統計手法に親しみのない人向けに分析手法の説明も充実している。人間科学部では様々な分析手法を使うが、統計分析の実践例の一つとしてもわかりやすい。

「私の 1 冊」を読む皆さんは大学に入学したばかりの方々だと思うが、そんな方々に本書を特に薦めたい。なぜなら本書には大学で取り組むことになる学術論文の必須要素がわかりやすく詰まっているからだ。必須要素というのは 1) なぜこの対象・国を選んだのか、2) 今までの学術研究でわかっていること、そして 3) この本が今までわかっていることに新しく付け加えること、である。

例えば本書はヨーロッパ全域、フランス、ラトビアやポーランドの人たちがなぜ移民に対して排外的になるのか、ということ进行分析している。日本に住んでいる私たちにとっては、ラトビアの出来事など関係ないと思ってしまうかもしれない。しかし、大学で学習することとなる学術研究は、個別のケースの研究を通して一般的な法則を知ることが目的としている。つまり、ラトビアのケースを研究することで、より一般的な、人はなぜ移民や外国人に対して排外的になるのか、という大きな問いに対する答えの一端を知ろうとするのが学術研究だといえる。こうした考え方を、本書は実にわかりやすく教えてくれる。

本書の内容をさらに発展的に知りたい人は、著者が引用している論文を読んでみるのがよいだろう。引用文献も充実している。多くの移民・排外主義研究が参考されているが、それだけ世界的に問題化しているトピックだといえるだろう。日本も向き合わなければならない移民・外国人問題を考えるためにも、本書から学べることは多い。

推薦： 五十嵐 彰（准教授／社会学・人間学系）

金菱 清

『震災メメントモリー第二の津波に抗して』

(新曜社 2014 年)

東日本大震災の被災地は復興と言うにはまだほど遠い状況だ。思うようには進まない復興事業と先が見えない福島原発の現状、その一方で、震災を風化させない活動や、東日本大震災を教訓に東海地震や南海トラフ大地震などに備えた「自助」「共助」「公助」の仕組み作りがある。どれも大切な社会的取り組みである。しかし、その前に、本書は「メメントモリ（死を忘れるな、死を想え）」とポスト3.11という時代を生きる私たちに問いかけている。東日本大震災の巨大津波が「第一の津波」であるのに対し、本書で扱っている「第二の津波」とは、第一の津波を経験した後にやってくる、被災者の「生活全般の過酷な再編と心身の苦痛を伴う耐え難い経験」である。この「第二の津波」に被災者はどのように対応しているのか。大きな復興論の前にもみ消されてしまう被災者の声無き声をすくい出したいという著者の願いが本書の通奏低音となっている。

本書の特筆すべき点は、数多くの現場を踏みながら、生存の議論となっている行政主導の災害復興のあり方を批判し、死者との関係性をも取り込んだ復興のあり方を社会学的に提示したことだ。現場に入った著者とその対象者である被災者との関わりは一方方向ではない。調査する著者も対象者から観察され、双方向のう

ちに、新たな何かが構築される。被災地では、研究者は冷たい観察者となることはできない。共同実践である。

ディタッチメントを強調する研究者は、被災地の人たちには不必要的な存在、もっと言えば、迷惑な存在ともなる。民俗学者の宮本常一は、調査対象者や地域へ迷惑をかけることを「調査地被害」と呼んでいる。相手の置かれている状況を考えずにインタビューをしたり、長時間相手を自分の都合で拘束するなどは論外であるが、調査地や調査対象者に迷惑をかけないようにと配慮しても、結果的に相手の迷惑になったり、相手の気分を害することになったりすることはある。

私もこの点に留意して、宗教施設を地域資源とした地域防災のアクション・リサーチを慎重に進めている（『利他主義と宗教』弘文堂、『震災復興と宗教』明石書店、<http://relief-map.jimdo.com/>）。

本書は、震災メメントモリを用いたレジリエンス論をもとに、「死者」をも取り込んだ復興、コミュニティのあり方、そして人間の生きる営みを問いなおす。社会学者のみならず、現代を生きるすべての人にとって意義ある一冊だ。

推薦： 稲場 圭信（教授／共生学系）

米沢 富美子

『「人生は、楽しんだ者が勝ちだ」私の履歴書』

(日本経済新聞出版社 2014 年)

本書は、日経新聞の「私の履歴書」として連載され、好評であったもので、一冊の本として刊行され、また、テレビ番組も放送されました。「研究も家庭も」両方取ると決め、どんな関門にも勇猛果敢に、あっけらかんと挑んできた。日本を代表する女性物理学者が明るい大阪弁で綴る痛快無比の自伝！」とあります。家庭を持ちながら女性が、次々と業績を成し遂げていくことを述べていても、自慢話にならずに痛快に気持ちがいいと男性からも書評を受けています。ライフワークを求め、ライフ&ワークバランスを求める若者に参考になればと思います。

著者は、1938 年大阪府生まれ。ご経歴は、京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科修了、理学博士。京大基礎物理学研究所で、湯川秀樹教授（阪大のときの研究で、日本初のノーベル賞を受賞）のもとで助手、慶應義塾大学教授などを経て、慶大名誉教授。専攻は理論物理学。不規則系の理論研究の第一人者。96 年から 97 年まで日本物理学会会長。2005 年ロレアル - ユネスコ女性科学賞受賞。

一冊ということですが、あわせて女子学生にご紹介したい書として、

●倉沢愛子『女が学者になるとき』草思社、1998年

東京大学での学園闘争、大学院進学、インドネシアの研究をするためだった。同級生と結婚。二人は一緒に研究に励むことを誓う。しかし、アメリカへの留学や研究生生活をつづけるうちに、二人の間に亀裂が生じる。著者はそれでも論文の執筆に打ち込み、遂にインドネシア研究の金字塔となる論文を完成させる。一人の女子学生が研究者に成長していく過程を語った希有な自伝。

●シェリル・サンドバーグ『LEAN IN 女性、仕事、リーダーへの意欲』日本経済新聞出版社、2013年。

著者は、フェイスブックの最高執行責任者であり、活動家、作家です。日本語や中国語など各国語に訳され、世界的ベストセラーとなりました。タイトルは、女性が仕事の場で何かと謙遜して遠慮（hold back）する傾向があるので、そうではなく勇気を出して身を乗り出そう（lean in）という意味です。

アメリカでもこうなのかと共感します。九州大学のその部局でただ一人の女性准教授（女性教授はなし）から薦められて読みました。

実業界のトップにいる女性としての孤独な経験について、初めて公の場で話す本書は TED で 200 万回以上も視聴された動画から生まれました。そのスピーチもご覧になってください。

https://www.ted.com/talks/sheryl_sandberg_so_we_leaned_in_now_what?language=ja

推薦： 大谷 順子（教授/共生学系）

山名 淳

『もじゃペー』に〈しつけ〉を学ぶ

—日常の「文明化」という悩みごと—

(東京学芸大学出版会 2012 年)

20 世紀も後半を迎えるころ、3 人の思想家によって 3 つの〈人間〉が発見された。アリエスによる〈子ども〉の発見、フーコーによる〈狂人〉の発見、そして、レヴィ＝ストロースによる〈未開人〉の発見である。

〈子ども〉〈狂人〉〈未開人〉は、長い歴史を通してずっと、文明化した人間社会の周縁に位置づけられてきた。彼らの存在は、社会の中心に位置づく人びとがとうに失ったとされる人間の「始源の生命力」を象徴すると同時に、人びとの安定した（つまりはマンネリ化した）日常生活を支える既存の社会秩序に鋭い問いを突きつけるものでもあった。それゆえ、社会の中心に位置づく人びとは、彼らが社会を脅かす存在とならないよう、彼らを文明化し社会の内側に安定的に位置づけるためのさまざまな技法を編み出した。その諸技法は、時にしつけや教育と呼ばれ、時に精神医療と呼ばれ、時に植民地政策とも呼ばれた。

「もじゃペー」こと『もじゃもじゃペーター』は、1845 年にドイツで出版された絵本である。作者のホフマンは、子どもたちの怪我や病気を診る医師であったが、西欧で本格化しつつあった精神医療の患者収容施設の改革者としても知られている。彼は、3

歳の息子へのクリスマス・プレゼントとして、この絵本を自作した。

全 10 話から成るこの絵本の主人公は全員、「悪い子」である。髪と爪が伸び放題の不潔なペーター、マッチに興味津々のパウリーネ、親指しゃぶりの癖が抜けないコンラート…。彼（女）らの末路は総じて悲惨である。ペーターは酷い侮蔑の言葉を浴びせられ、パウリーネは靴だけ残して灰となり、コンラートは親指を切られる…。

「悪い子」が子どもには似つかわしくない悲劇的な結末を迎える物語を集めた絵本。この絵本は、出版から 80 年の間に 539 版を重ねるロング・ベストセラー作品となった。ところが、ある時期を境に、「子どもの教育上、好ましくない」絵本として批判の対象となっていく。歴史上のこの変化は、教育学的、人間形成論的に見て何を意味するのか。

『「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ』は、この絵本の誕生・出版・評価を歴史的に分析するなかで、しつけ、教育、精神医療などの文明化の技法に潜在する政治性を読み解く秀作である。ヒトを既存の社会に安定的に位置づく人間にするための文明化の技法は、いかなる可能性と問題性を内包しているのか。教育学、人間学に関心のあるあなたに、ぜひ、読んでもらいたい 1 冊である。

推薦： 岡部 美香（教授／教育学系）

岡ノ谷 一夫

『さえずり言語起源論』

— 新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ —

(岩波書店 2010 年)

小鳥の歌はヒト言語の起源であるか？この問いに二択で答える
 とすると「いいえ」である。動物の音声は言語というより笑い声
 のような情動発声に近く、小鳥は歌で互いに意思疎通をしている
 わけではない。しかし、その歌について、個々の音節が表れる構
 造を詳細に解析すると、なんとヒト言語との共通要素である「文
 法」が存在するという。本書は、ジュウシマツという飼い鳥とし
 て親しまれる小鳥の歌研究から、ヒト言語を支える神経基盤とそ
 の進化シナリオを提案している。

本書では、動物行動研究のオーソドックスな枠組みである「テ
 インバーゲンの4つの問い」に沿って、著者の研究事例が紹介さ
 れる。小鳥が複雑な歌をさえずる理由が、「なぜ」「どのように」
 という異なる水準の問いにより検討され、興味深い事実が次々と
 明らかになる。「なぜ」は行動の機能、「どのように」は仕組みに
 対応する問いである。この問いの立て方の枠組みは、動物行動研
 究だけではなく、様々な現象の理解に役立つだろう。

動物行動研究は、ヒトの行動理解にいかに関与できるのか。本
 書では、2つの方法で小鳥の歌からヒトの言語起源に迫ろうとす

る。まず、両者の共通点に加え、相違点が明確に指摘される。相違点が分かれば、小鳥の歌のどの構成要素がヒト言語のよいモデルとなるのか、的を絞ることが可能になる。次に、なぜその行動が進化の過程で生じたのかという原因(淘汰圧)に焦点を当てる。小鳥の歌を現在の形に進化させた淘汰圧が分かれば、その相似であるヒト言語の文法が進化した過程について、示唆が得られる。単にヒトと類似する動物の行動を取り上げて、「動物も〇〇ができる」と解釈する過度な擬人主義的とは距離を置いた、ヒトの行動理解のためのアプローチを知ることができる。ちなみに、この言語進化シナリオに対しては意見したい点は色々あるものの、発想の転換ともいえる大胆な仮説は読んでいてわくわくする。

個人的には第3章に共感を覚える。私自身は主にサルを対象に、行動生態学と比較認知科学の間でどっちつかずの研究を行っている。著者は神経科学と行動生態学という相反する分野に身を置いた経験が、研究の深みと広さをもたらしたと述べる。面白いが苦労も多い、学際研究の実際に触れることができる。

本書は著者のキャリア初期を描いた青春記としての側面もある。専門性を深めるだけではなく、研究者の生きざまに触れられる読み物としても推薦したい一冊である。

推薦： 勝 野吏子（講師／行動学系）

マイケル・トマセロ（橋 彌 和秀 訳）

『ヒトはなぜ協力するのか』

（勁草書房 2013 年）

われわれヒトは生まれながらにして道徳的なのでしょうか？それとも経験や教育によって道徳的になるのでしょうか？これらの哲学的問いは古くから古今東西で議論され、人々の関心の対象であり続けた。

近年、発達科学の進展により、この問いの解決の一端となるような知見が積み重ねられている。私自身もこの流れの中で、赤ちゃんの正義感に関する研究を過去におこなったが、その発端となったのは、科学誌のトップジャーナルである *Science* 誌と *Nature* 誌に 2006・2007 年と立て続けに掲載され話題となった 2 つの研究であった。前者は生後 18 ヶ月のよちよち歩きの赤ちゃんが困っている見知らぬ他者を目にすると助けることを示した研究であり、後者は言葉をしゃべれない生後 6 ヶ月の赤ちゃんが他者のふるまいの善悪を判断することを実証した研究である。本書の著者であるマイケル・トマセロは、前者の論文の著者であるだけでなく、その後も現在に至るまで乳幼児の道徳性や向社会性について数多くの実証研究をおこなっており、まさにこの研究領域を牽引してきた人物であると言える。

トマセロは、はじめに言語発達の研究をおこなっていたが、彼を唯一無二の存在たらしめたのは、本書でも紹介されている一連

の比較認知発達研究である。彼のラボでは、主に1歳過ぎから就学前児を対象に、シンプルではあるが精緻な実験デザインを用い乳幼児の認知発達に関する知見を積み上げてきた。特に、その生態学的妥当性の高い実験デザインはチンパンジーとの比較研究に適用しやすく、ヒトとチンパンジーの共通性や差異、それぞれのユニークさを明らかにしてきた。

本書にはそれらの近年の研究が余すところなく盛り込まれており、包括的にまとめられている。本書を読めば、発達早期におけるヒトの道徳性や向社会性についての最新の発達科学の知見や理論を知ることができるだけでなく、ヒトという種の特異性を垣間みれるであろう。また、本書のユニークな点は、トマセロの理論に対して、関連領域の一流の研究者が自身の観点からその是非についてコメントしているところである。理論に対するさまざまな批判は、科学においては当然の態度である。そういったさまざまな可能性を示すことこそ科学的には意義があり、その態度を体現している本書は、初心者にとってもプロにとってもまさに科学的良書ということができる。

推薦： 鹿子木 康弘（教授／行動学系）

宮本 常一

『忘れられた日本人』

(岩波文庫 1984 年)

さまざまな分野からの「つつこみ」や「読み」を受け容れることができるような包容力のありなしが良書か否かの判断材料になるのだろう。その点からいうと、民俗学者・宮本常一の『忘れられた日本人』は、良書のひとつとして数えることができるだろう。本書は、宮本が 1939 年から日本全国を歩きまわるなかで、土地の古老から聞いたはなしをまとめたものである。

本書の底本は、1960 年に未来社から出版された。当時の生活改良普及員のあいだで、ライフヒストリー（生活史）の聞き取りのさいの、いわば教科書として読まれた。現在でも、ライフヒストリーをもちいた研究の「古典」としての位置づけにある。

社会史の面では、メインストリームの歴史記録に隠れてしまってみえないが、しかし「忘れる」ことができない世界があったことを本書は示している。四国の遍路道にたいする、「カッタイ道」や「夜這い道」の存在がそうである。また、本書の末尾で解説を書いている歴史家・網野善彦は、「村の寄り合い」のなかに出てくる「世話焼きばっば」や、老女たちだけの「泣きごとの講（観音講）」や「女だけの寄り合い」などを引き合いに出しながら、女性独自の世界がリアルに描かれている点に着目している。女性（老女たち）独自の世界は、現代においては「女縁」（上野千鶴

子) などとなっておおきく様変わりしている。

介護の臨床場面でも注目されている。宮本は「あとがき」で、われわれは自分たちより下層の社会に生きる人々を卑小に見たがる傾向が強く、それで一種の悲痛感を持ちたがるといい、そのことを戒めている。民俗学者で介護職員の経験をもつ六車由実は、『驚きの介護民俗学』(医学書院)の記述を、『忘れられた日本人』におさめられた「土佐源氏」の紹介からはじめている。六車は、「援助を必要としている人」という、こちら側がもうけたレッテルを貼ってケアをすすめる傾聴や回想法の限界を指摘し、他方で、みずからが生きた歴史の「語り手」として認知症者を正当に認める「聞き書き」の手法の可能性を主張している。まさに宮本の「戒め」につうじる考え方である。

作家・司馬遼太郎は、宮本ほど日本人の話を聞き、山河を歩きまわった人物はいないといい、作家・池澤夏樹は、「土佐源氏」はどんな小説よりもおもしろいといった。宮本の魅力は、人間存在の多様性と多面性を、足で稼いで描いていることにあるといえよう。

将来、フィールドで聞き取り調査をしたいと考えているひとにぜひ読んでもらいたい一冊である。

推薦： 河森 正人（教授／共生学系）

アリス・ウォーカー 『カラーパープル』

(集英社文庫 1986 年)

この本は、奴隷解放から半世紀が経った 20 世紀初頭のアメリカ南部、ジョージア州に暮らす黒人女性セリーの物語である。個性豊かな登場人物が織りなすストーリーの中に垣間見えるのは、折り重なり交差する差別と支配の構造である。物語では、白人による黒人差別だけでなく、黒人男性から黒人女性への暴力と支配、貧富の格差、さらにヨーロッパ諸国による植民地支配が描かれる。「おまえは黒人で、貧乏で、醜くて、女じゃないか」。夫がセリーに吐き捨てた言葉は、黒人女性がさらされる差別の重層性を端的に表している。

セリーは、父親や夫から虐げられる過酷な状況に対し「どうやって闘えばいいか分からない」とただ耐え忍ぶ。日々を生きることによって精一杯である上に、セリー自身が抑圧的な価値観を内面化することで、数々の理不尽に抗うことができなくなっているのである。それでも、自由奔放なブルース歌手のシャグや、腕っぷしも気も強いソフィアら周囲の女性たちとの出会いと愛情がセリーを少しずつ変え、やがてセリーは自らの意思で前に進んでいく。

作者のアリス・ウォーカーは、小説の舞台と同じジョージア州の小作農の親のもとに 1944 年に生まれ、小説家になる前の

1960年代には公民権運動に身を投じている。本書は一人の女性の成長と自立の過程を描くとともに、こうした作者自身の背景を反映したと思われる、当時の人々の息遣いのようなものを感じさせる。黒人差別の解消を訴えた運動は、その後女性やエスニックマイノリティ、性的少数者の解放運動へと広がり、日本のマイノリティの権利運動にも少なからず影響を与えた。Black Lives Matter 運動が訴えるように、アメリカの人種問題はこんにちまで連綿と続いている。本書はその背景を理解する手がかりにもなるだろう。

1983年に本書の原作がピューリッツァー賞と全米図書賞に選ばれた際、黒人女性作家による受賞として大きな注目を集めた。裏を返せば、それまで高く評価される文学作品の多くは白人男性の手によるものだった。この原作はいわゆる格調高い英語ではなく、南部アクセントの黒人女性の声が聞こえてくるような文体で綴られている。英語に興味のある人は、ぜひ原作も手にとってみてほしい。私がこの本を初めて読んだのは、学部生の時の英語講読の授業だった。学校で習ったものとは大きく異なる英語で、黒人女性の視点から描かれたアメリカの物語は、新鮮であり衝撃だった。いま振り返れば、あれは多文化社会の教育研究に関心を持つきっかけの一つだったのだと思う。

推薦： 北山 夕華（准教授／教育学系）

エーリッヒ・フロム 『自由からの逃走』

(東京創元社 1951 年)

名著とは、多くの人が求めているものごとを言い当ててくれる本だと私は思います。半世紀以上にわたり世界中で読まれてきた『自由からの逃走』は、まさにそうした一冊です。高校の社会の授業でも取り上げられるので、中身についてはおおよそ知っているかもしれませんが、精神分析、社会心理学、哲学思想、社会意識、近代社会論など人間科学の諸領域が重なり合う位置にある読みやすい本です。訳者である社会学者日高六郎の日本語表現も秀逸です。この機会にぜひ手に取ってみてください。

著者のフロムは、1930 年代のナチス台頭という 20 世紀最大の歴史的事実を、当時のドイツの大衆の心の奥深くにあるサド・マゾヒズム的性格から読み解いています。民主憲法で有名なワイマール共和制下のドイツ市民は、身分や血縁に基づく繋がり（第一次的絆）から切り離された近代的な個人として、自由を手にしていました。しかし合わせて、第一次世界大戦の敗戦国民として経済的な責任も負わされていました。近代的な個人は、確かに自由ではあるのですが、埋め込まれる先を失って孤立し、無力な状態におかれるものでもあります。その不安定な状態にあって、ものごとの良し悪し、行動目標などについて、常に自分自身に問いつける責任からも逃れることができません。それこそが、民主主義

というものを成り立たせる市民のあり方だからです。これはとても不安で居心地の悪いものなのだとフロムはいいます。

そこで何が起こったか？ドイツ国民はせっかく手にした近代的（民主主義的）自由を捨てて、ヒトラーが牽引するナチズム支持に走ったのです。これについてフロムは、強力な外的権威を無批判に受け入れて服従し（マゾヒズム）、その権威に基づいて他者を激しく攻撃することで（サディズム）、自分自身がしっかり確立しないまま、複雑な社会環境と向き合うことの苦しさから逃れようとしたのだと分析しています。これが「逃避のメカニズム」すなわち **escape from freedom** です。

フロム自身は、フランクフルトからアメリカへの亡命を余儀なくされたユダヤ人研究者でした。にもかかわらず、かれはナチズムをヒトラーやドイツ人の狂気に帰するものだと断じることなく、自らの怒りや悲しみを押し殺しつつ、大衆の心のしくみを冷静に分析していきます。読み返すたびに私は、その科学者としての構えに対する敬意を新たにします。

推薦： 吉川 徹（教授／社会学・人間学系）

フリードリッヒ・エンゲルス

『家族・私有財産・国家の起源』

(岩波文庫 1965 年)

(原書(ドイツ語) 1884 年)

私は現在、ジェンダーの視点から教育やマスメディアを分析・考察するという研究をしています。その出発点には、「なんで女だけ〇〇せなあかんの?」「女より男の方が生まれつき偉いかなあ?」などの、子どもの頃からの素朴な疑問や不安がありました。

その昔、四国から出て(私にとって四国は「脱出すべき閉じられた島」でした)、大阪大学の人間科学部に入学後、それまでの受験勉強から解放された私は、授業や学生同士の討論などを通じて、新鮮な空気を胸一杯吸うように、さまざまなことを学び、一気に視野を広げていきました。視野の広がりの一つが、上述した子どもの頃からの疑問や不安には、「性差別」という名前が与えられているという認識でした。それが社会問題として位置づけられ、撤廃や解消のための運動も存在していることを知るプロセスは、女性として育てられてきた自分のアイデンティティや価値観をも問うプロセスでもありました。

ありがたいことに大学(とその周辺、大阪なる土地の持つ力も大きい)という環境は、個人としての思いに翻弄されるだけではなく、性差別を社会科学的に扱うことを学ぶ機会を提供してくれ

ました。性差別が生まれるメカニズムや性差別を維持するシステムを社会科学として分析するとはどういうことを教えてくれた書籍の一つが、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』です。推薦したい本は山のようにありますが、一つ古典を挙げるとすれば、これだと考えました。ただ、いかんせん、19世紀の本です。その後、この本は種々の観点から批判されます。エンゲルスが引用している人類学の知見についてなど、事実関係はくれぐれも鵜呑みにしないでください。しかし、ものごとを歴史的に、システマティックに考える、社会科学のものの見方のエッセンスを知っていただくには、良書ではないかと思います。

推薦： 木村 涼子（教授／教育学系）

金井 壽宏

『働くみんなのモチベーション論』

(NTT 出版 2006 年/文庫版 日本経済新聞出版 2016 年)

やる気（意欲あるいはモチベーション）は、身近ながらも不思議な現象である。何かやらなきゃ落ち着かないという程にやる気に満ち溢れていることもあれば、やらなきゃいけないとわかっているのにやる気が出てこないということもある。どうすればやる気を自在に引き出すことができるのか、という疑問はおそらく誰しも抱いたことがあるものだろう。

本書が推奨する方法は、自分の、そして人々のやる気について持論を持つことである。持論を持つといっても、「こうすればやる気が出るんだ！」とがむしゃらに根拠もなく信じよということではない。どんな時に、どうすれば、なぜやる気が出る（あるいは出ない）のか、自分と人々についての深い理解を持つことを勧めている。人は誰でも、経験を通じて、人や心についての暗黙の理解を作っている。その理解を、明確に自覚し、実践に活用することが、やる気を自在に引き出すために重要だと述べられている。

持論さえあれば研究者の理論は不要、などというわけではない。確かに、研究者による理論は、いずれもやる気の全てを網羅的に説明できるとは限らない。盲目的に一つの理論だけを信じて実践するのは、理論とのよい付き合い方とは言えない。しかしながら、

研究者たちの理論は、実証的な知見をもとに、主張の確からしさや限界点を評価する試みの中で生み出される。これに対して、個人の経験のみに基づく持論はあくまでも素朴理論であり、偏った見方や曖昧さを含みうる。研究者たちが築き上げてきた理論を学び、持論の素材としながら、視点を広げ、より確らしく、多様な人々・状況を理解できるような持論を練り上げるのが望ましい理論との付き合い方として論じられている。

各論では、こうした持論アプローチを支援する観察・内省のエクササイズや、素材となるいくつかの研究者の理論が紹介されている。後者の理論紹介に関して、本書は持論を中心に展開しているため、人々の気づきからボトムアップに類型化される。よりトップダウンな研究の流れや、諸理論の詳細については他書（例えば、鹿毛雅治『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』金子書房、2013年など）も参照しながら学ぶと理解が深まるだろう。また、本書も鹿毛(2013)も引用文献の書誌情報が豊富であり、関心を持った理論・現象・研究があれば、原典にも触れると、著者らが注目していないポイントを見つけられるかもしれない。

本書はやる気をテーマに持論アプローチを紹介する一冊だが、このアプローチは他の人間科学的なテーマを学ぶことにも通じるだろうと考える。「やる気」という身近なテーマへのアプローチから、人間について自分なりの持論を考える手がかりを得てもらえたと嬉しく思う。

推薦： 後藤 崇志（講師／教育学系）

檜垣 立哉

『食べることの哲学』

(世界思想社 2018 年)

食べることは、人間のみならず、すべての動物に共通している。動物は食べることなしに生きることはできない。人間もまたそうであるということは、人間もまた動物であることである。その一方で、人間は単なる動物ではない、と人間は自らのことを考える傾向にある。たとえば、「文化」と呼ばれるものは、ときにそのような動物以上の何かを、人間が誇るべき何かを表していると考えられることがある（実際にそうなのかはわからない）。

食べることは、人間の自然の側面と文化の側面の両面をつないでいるというところが、哲学の主題として重要な点であり、またとりわけ、自然科学と人文科学の両面を架橋する人間科学部で哲学を考えるうえでも同様に重要な点である。人間を文化的存在に還元するでもなく、自然的存在に還元するでもなく、ただひたすらその間にあって、その間にあるということがどういうことであるのかを考え続けることこそが、人間科学にとって重要なことではないだろうか。

食べることは、一方では、フランス料理や中華料理に代表されるような、都市文化を代表するという華々しい側面をもつと同時に、他の生きものの生命の犠牲にすることの上にか成り立たないという「薄暗い」側面をもつ。その「薄暗さ」は、生きものであることの重要な点に触れているように思われると同時に、人間の社会的生

活を組織化する礎となるタブー（インセスト・タブーとカニバルのタブー）と関わっているのではないかと、本書の著者は論じる。

食えることから説き起こしつつ、人間の社会、文化、道徳、倫理といったことがらの多様な側面について横断的に思考を巡らすことを通して、人間科学部で哲学をするとはどういうことかを教えてくれる。

著者の檜垣立哉は2023年3月まで20年以上にわたって人間科学部で教壇に立っていた哲学者であり、この本に出てくる風景の多くは、この人間科学部での出来事であり、また本の設計自体も人間科学部での学部生向け授業を基になされている。その点で、人間科学部の学生が最初に読むのにふさわしい。

推薦： 近藤 和敬（准教授／共生学系）

アルヴァ・ミュルダール、ヴィオラ・クライン

『女性の二つの役割：家庭と仕事』

(ミネルヴァ書房 1985 年)

(原著初版 1956 年)

アルヴァ・ミュルダール(1902-1986)はスウェーデンの外交官、国会議員、社会学者という職歴のなかで、国連の軍縮交渉において重要な役割を果たし、ノーベル平和賞(1982)を受賞している。アルヴァは、夫で経済学者であるグンナー・ミュルダールとともに戦前から福祉国家を論じ、特にアルヴァ自身は女性のために社会はどうあるべきかを論じてきた。

「社会機構に何か間違っている。男性は過労や心労が原因で早死にし、その未亡人や妻は職場進出の機会がない」「現在の家庭生活では夫の役目は週末に限られており、それ以外は不在中に起こった家庭の問題について、妻の報告を受けるだけ」「既婚女性が就労することで全般的な労働時間の短縮が可能となり、父親の労働時間を短くできる」。これは1956年に出版された原著の一節であるが、労働、家事、余暇を男女が平等に分ち合うことで、人間らしい生活と理想的な家庭の営みが可能になるだけでなく、そのことが経済の発展に不可欠であることを、社会的なデータを数多く用いて論じている。

「男女平等の国」として紹介されるスウェーデンだが、本著が出版された1950年代は今とは明らかに違っていた。当時、アルヴァの

いう‘共働き社会’は、多くの女性たちから批判された。「仕事と家庭の二重の役割を果たさねばならない女性の苦しい状況を軽く見ている」。それでもアルヴァは、議論を続けた。人の寿命の伸びは著しく、平均結婚年齢の時点で、その後、半世紀以上生きていかなくてはいけない高齢社会を考えると、女性も人生 80 年時代を自分で設計し、自立して生き抜いていかないといけない、と。

スウェーデン社会は 1960 年代以降、大きく変わっていく。今では平均年間労働時間 1600 時間、明らかに労働、家事、余暇を男女で分かち合う国である。アルヴァが 60 年前に予測した社会である。アルヴァは前書きに次のように書いている。「社会学者の仕事は、与えられた時間と場所にあるがままの状況を、厳密に研究し、かつ説明することである。また考察した事実にもとづいて、近い将来に予測される事態の展開について、ある程度の予測を行うことである」。ある程度の予測ができれば、近い将来の社会の変動に見合った備えができる。

私がスウェーデンという国に関心を持ったのは大学 3 年生の時。日本では男女雇用機会均等法（1985 年）が成立し、なんだか日本の社会が変わっていくようで、わくわくした。その後、あっという間に 30 年が過ぎたが、日本では長時間労働で若者が命を失い、都市部での保育所不足は深刻で、労働、家事、余暇を男女で分かち合う社会には程遠い。次の 30 年後に日本はどう変わっているのだろうか。

推薦： 齊藤 弥生（教授／共生学系）

ジャレド・ダイヤモンド著 楡井 浩一訳 『文明崩壊（上/下）：滅亡と存続の命運を分けるもの』 （草思社文庫 2005 年）

「自然を知り、人を知る」

ジャレド・ダイヤモンド博士は、生物学、進化学、人類学などを専門とするアメリカの研究者です。彼は、幼少期からバードウォッチングに親しみ、言語、地理、歴史など幅広い分野に興味をもつ人でした。ハーバード大学の生物学部を卒業し、ケンブリッジ大学で生理学の博士号を取得した博士は、ニューギニアでのフィールドワークの体験をもとに、1997 年、世界的ベストセラーとなる『銃・病原菌・鉄：1 万 3000 年にわたる人類史の謎』を出版します。この書籍も大変面白いのですが、私が今回紹介するのは、その後に出版された『文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの』です。

社会について、何を成功・失敗とするかは、様々な考え方があります。博士は「存続」、つまり持続的であることを一つの成功とみなし、過去にあったいくつかの社会について、その成否を、自然環境との調和という視点から洞察します。

私の専門は、保全生態学です。これは、生態学（ecology）の知見を自然環境の保全に活かすという視点で発展してきた学問です。ダイヤモンド博士は、この分野でも重要な論文を発表されています。例えば、人が自然を利用し、土地を改変しなくてはならない場合、もともとあった自然は、どのように保全されるべきでしょうか。全て使い尽くしてしまえば、人は自然の恵みを享受できず、他の生

き物たちも絶滅してしまいます。この問いについて、博士は、後に6つの原則といわれる空間概念を提示しました。詳細は省きますが、博士のアイデアは現在、生物多様性を守り、賢明に利用しながら、豊かな社会を築いていくための重要な理論として位置づけられています。そのダイヤモンド博士が、人類史と対峙し、自然と人との関係について壮大なストーリーを示したことは、私にとって、衝撃でもありました。

『文明崩壊』で示された博士の説は、出版後、多方面から検証がなされています。そうした議論も含め、私たちが自然と共にどのような社会を築くべきか、考えさせてくれる一冊です。

推薦： 佐伯 いく代（准教授／共生学系）

青木 省三

『僕のこころを病名で呼ばないで』

(ちくま文庫 2012 年)

産業領域において心理職として臨床をしていると、「これって〇〇病なんでしょうか…？」と心配そうに來談される方や、「あの人が何度注意しても××してしまうのは〇〇障害だからですよね？」とこころの病かどうかを確認しにこられる方によく遭遇します。

ネットの力はすごいです。なぜその病気に思い至ったのか聞いてみると、大体、ネットと答えます。念のため「症状」を聞いてみても、ほぼ間違いなさそうなことも結構あります。

しかし、そう見えるからといって、私の方から「病名」を口走っていいのか、いつも躊躇します。「病名」はいろいろな人を動かす力があります。周囲が必要以上に腫物に触るような扱いをするようになってしまうことや、「ちゃんと治療してからじゃないと一緒に働きたくない」などと言い出す人もいます。

もちろん「病名」は安心感をもたらすものでもあります。そして、「病名」のもとで研究され効果が確認された心理療法があれば、回復までの道のりにいくばくかの安心感がもたらされます。「病名」を名付けられた人は療養に動機づけられ、周りにとっても療養への配慮が行いやすくなるなど、潤滑液にもなりえます。

気を付けなければならないのは、「病名」を名付けることによっ

て、その人の本当の姿が見えづらくなってしまうことです。よくよく話を聞く前から漠然としたイメージの色眼鏡でみてしまったり、必要以上に「治さないといけないもの」と（時には治療者までも）駆り立てることも少なくありません。どのように困っているのか、周りがどのようにすれば配慮すれば働きやすいのか、得意なことや強みは何なのか…という細やかな部分への視野が狭窄しがちになるのです。

ともすれば、体験のない方からは漠然とした偏見を向けられがちなのがこころの病です。自分自身についても「自分は〇〇だから××はできない…」とチャレンジ前から予想してしまうことだってあります。そんな「病名」や心を取り巻く様々な事柄について、細やかな部分への視野を与えてくれるのがこの本です。科学という名前がついている人間科学部において、「客観的に正しい」こころの病の像を探求することは大事なことのひとつといえるでしょう。客観性の力についてもすでに述べた通りです。しかしそれと同時に、この本がもたらすような細やかな部分への視野、そして配慮を身につけることができれば、やわらかくその力を使っていくことができるでしょう。

推薦： 佐々木 淳（教授／教育学系）

松田 素二、津田 みわ 編著

『ケニアを知るための 55 章』

(明石書店 2012 年)

この手の本を大学教員が推薦するのは珍しいかもしれない。この「～を知るための・・・章」は、エリアスタディ（地域研究）のシリーズとして、これまでに 300 冊近くが刊行されている。世界各国（地域）の概要をわかりやすく解説し、それでいてその内容に深みがある。決して、表面的な国情を紹介したものではない。なぜこのような奥深さが出るのか。その理由は、執筆者の多くが大学の研究者であり、現地の人びとと生活を共にし、その社会や文化に関心を持ち、長いフィールドとの付き合いの中から醸成されているからである。研究という新たな知識をつくりあげる作業を地道に行ってきたからこそ書けることでもある。仮に批判的な内容であっても、その裏には地域の人びとに対する敬意と愛情がある。

本書は文字どおり 55 章から構成されており、「はじめに」「自然と人びと：環境」「社会の移り変わり：歴史」「国のかたち：政治・経済」「活力と難題：社会・文化」「暮らしぶり」「日本とケニア」「おわりに：21 世紀のケニア」の 8 部に分類されている。ここで驚くべきことは、日本人だけに限定しても、遠いケニア一国について、これだけの広範にわたる内容を書ける専門性の高い研究者（38 人）がいるという事実である。

私はサブサハラ・アフリカ地域の教育、特にケニアについて、20 年以上にわたって研究を続けている。その間、毎年、1～2 回渡航している。研究者自らがフィールドに身を置き、そこで起きていることを観察し、人びとから話を聞くことは、苦労も多いが、楽しいことである。研究者は、訪問者ではない。研究をするという行為は、現地の人びとから学びながら、自ら反省する繰り返しでもある。同じ学校に 20 年間通い続けても、毎回新たな発見がある。これは学校がダイナミックに変容していることに加え、研究者の立ち位置が変わり、同じ事象であっても見え方が変わってくるからである。

自分の関心のある国や地域があれば、このシリーズの中から関連する書を手にとって読んでみてもらいたい。編著者の一人（松田）は、第 1 章の結びとして、次のように述べている。「ケニアは、日本から地理的にも心理的にも遠いところに位置しているが、この本を通して、同時代に生きる人びとがづくりあげている地続きのケニア社会にふれてほしいと願っている」。

推薦： 澤村 信英（教授／共生学系）

クリストファー・チャブリス、ダニエル・シモンズ 『錯覚の科学』

(文春文庫 2014 年)

「見落とす」「見誤る」「思い込む」など、人間は生きていく中でいろいろな「錯誤」をします。それはあるときは笑い話になり、またあるときにはそれは人が命を落としたり、大損をしたりすることにも繋がるのですが、そこには人間の心の不思議な働きが関係しています。この本はいろいろな興味深い事件や現象を紹介し、それが認知心理学の観点でどのように説明できるかを解き明かしていきます。具体的には、「2001 年にハワイで起こったえひめ丸と米海軍原子力潜水艦の衝突事件」「ヒラリー・クリントンの誤った戦場体験の記憶」「リーマン・ショックの原因となった投資家の誤解」などが取り上げられています。この本の著者は著名な認知心理学者で、「テレビの映像を集中してみているときに熊の着ぐるみを着た人がその映像の中に入ってきて気づかない」という注意のデモンストレーションで有名な人ですが(いわゆる「脳トレ」系のテレビ番組で見たことがある人も多いのではないのでしょうか)、日常的な現象と認知の関わりをわかりやすく説明しています。私の専門は応用認知心理学で、この本の中で取り上げられている内容の多くが私の研究領域に重なっているのですが、実際の研究活動では、この本の中で紹介される現象を心理学実験の手法を使って検証するということを行っています。

また、「911の大規模テロはアメリカ政府の陰謀」とか「モーツアルトの音楽で頭が良くなる」といった怪しげな陰謀論やニセ科学がなぜ広く信じられるのかについても、認知の観点から解き明かしていきます。特に日本では東日本大震災以降、特に原発事故の影響に関して真偽の定かでないさまざまな情報が流されました。情報を鵜呑みにせず批判的に理解することはとても重要なことです。情報の送り手と受け手が持つ認知的特性を理解した上で、得られた情報を利用できるようになることは、よりよく情報社会を生きていくために大切なことですが、この本はそのような知識やスキルを身につける上でもとても有用な一冊だと思います。

推薦： 篠原 一光（教授／行動学系）

信田 敏宏

『ドリアン王国探訪記－マレーシア先住民の生きる世界』
(臨川書店 2013 年)

私の専門は人類学（文化人類学）である。文化人類学を語るうえで欠かせないものにフィールドワーク（現地調査）がある。「フィールドワークを抜きにして文化人類学は成り立たない」。そう言っても過言ではないほど、フィールドワークは文化人類学にとって重要なものであり、また文化人類学者にとって刺激と魅力に満ちたものである。私もフィールドワークに魅了された者の1人だ。

文化人類学者は皆、フィールドワークに赴き、そこで得た知見を手がかりにして本（民族誌）や論文を書いたりすることで、研究成果を公開してゆく。しかしながら、それら最終的な研究成果に比べると、一つの研究の始点から終点までのプロセスをフィールドワークに軸足を置きながら描き出したもの、言い換えるならば、フィールドワークを介して研究対象地で得られた知見が、どのようにして最終的な研究成果へと形を成していったかを跡付けた著作は、意外と少ない。

本書は、マレー半島の先住民の社会におけるイスラム教や開発の動向をめぐって長年にわたり文化人類学的研究を行ってきた著者が、そもそもなぜそうした社会や研究テーマを選んだのかといった点にも目配りしながら、自らのフィールドワークの様子を

わかりやすく、臨場感たっぷりに描き出したものである。文化人類学のフィールドワークの魅力や、フィールドワークが研究成果とどのように結びついているのかを知るうえで、格好の1冊である。

ちなみに、本書は臨川書店のシリーズである「フィールドワーク選書」の1冊でもある。このシリーズは20冊からなり、20人の文化人類学者（および考古学者）たちが、海外の研究対象地でそれぞれが行ったフィールドワークについて、1冊ずつ書き下ろしている。20冊の対象地域は、北は北極圏から南はカラハリ砂漠まで。アジア、アフリカ、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパを網羅している。また、著者たちの研究テーマも、衣服、食物、宗教、医療、音楽、言語などと多岐にわたる。本書だけでなく、シリーズのなかから自分の関心のある地域やテーマに応じた1冊をピックアップして読むことも、併せてお勧めする。

推薦： 白川 千尋（教授／社会学・人間学系）

帚木 蓬生

『ネガティブ・ケイパビリティ― 答えの出ない事態に耐える力』

(朝日新聞出版 2017 年)

「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」とは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」あるいは「事実や理由をせっかちに求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力」のことである。これは、詩人キーツが兄に宛てた手紙に書いた言葉で、精神分析家で精神科医のウィルフレッド・ビオンがのちに紹介した概念である。

私たちは生きてゆく中で、困難やどうしようもないことに度々出会う。その時、それを抱えた状態でその場にとどまるにはかなりの精神力が必要となる。それゆえに、どうしても解決できなさそうな場合には、回避してみたり、とりあえずの答えを出してみたり、拒否してみたり色々と工夫しながら乗り切ろうとするのであるが、そういった時に、この「ネガティブ・ケイパビリティ」を知っているとその場でとどまるということが少しでもしやすくなるのではないかと思うのである。常にとどまっていればよいというものではないが、とどまることで深まってゆくものやひらかれてゆくものがあるということは、心理臨床に身を置く私自身、これまで受けてきた訓練やクライアントさんとの出会いを想うと納得できるものである。

本書ではキーツとビオンの生涯も紹介しながら、彼らがどのようなにして、この「ネガティブ・ケイパビリティ」にたどりつき、その概念を用いたのかを記述した上で、現代社会を生きる私たちにとってこの能力がどのような意味を持つのか、またなぜ必要であるのかということを教えてくれる。

著者は精神科医で作家の帚木蓬生である。本書に専門的用語はほぼ使用されていない。ごく平易な言葉で読みやすく構成されており、教育医療、また著者の具体的日常や著名人の人生なども織り交ぜながら、私たちが日々を過ごす中で忘れてはならないものを示してくれている。

問題を解決する力や様々なものへのアクセスのしやすさ、スピード感、便利さが求められる今日であるが、私たちが人の中で生きてゆくために、「ネガティブ・ケイパビリティ」も大切に出来ればと思うのである。

臨床心理学を学ぶ方のみならず「人間」を「科学」する学部の方の皆さんの今後の研究や実践にとって、何らかの手掛かりとなるものを得ることができる著書である。

推薦： 管生 聖子（准教授／教育学系）

筒井 清輝

『人権と国家

—理念の力と国際政治の現実—』

(岩波新書 2022 年)

人間科学を学ぶのなら、人権問題は避けて通れない。人権法を学ぶための法律用語は骨が折れるが、本著は国際人権の歴史と歩み、意義と課題を分かり易く論じる入門書である。紛争やジェノサイドと言った国家間の問題から NGO や企業といった組織、夫婦別姓などの個人まで、多様な人権問題を網羅している。私が国際災害支援に入る前や、本著で成功例としているインドネシア・東ティモール真実友好委員会関係者に遭遇したときに知っていたら、相手を理解しもっと行動し易かっただろうと、学生の皆さんが将来グローバル社会に出て役に立つ基礎知識も兼ねて本書を選んだ。

国際人権は別の見方をすれば、人間が愚かにも繰り返してきたジェノサイドのような人権侵害の抑止の失敗の歴史でもある。それにもかかわらず、内政干渉を嫌う国家の壁を乗り越えようとした市民や国際社会の取り組みによる、わずかしかな成功例と歩みの流れが把握できる。4 章では世界の人権のその流れに対して、日本がどのように歩んできたのか、また取り組んで来なかったのか。アイヌや在日コリアンの問題なども事例に取り上げている。これから大学で取り組む卒業論文研究が、人権の歴史のどこに位置するのか。確認してみるのにも良いと思う。

私事だが、著者と私の姉は中高6年間クラスメイトで母親同士も近所で親しかった。姉から「授業のノートを全く取らずに聞いているだけ」と聞いた。板書のノート取りに終始しがちだった小学生の私は驚嘆し、少し畏怖の念を感じ、学者一家の著者が、どんな研究者になるのか、遠巻きに見て話をしたことはない。本著を通して「我々はどうやって自分の属する社会集団の外にいる人々の苦しみに共感できるようになったのか。」とSDGsの回答にもなる問い立てをする研究者になったと知った。

さて、大学では自分の読んだ本の著者に会ったり、話したりする機会というのも醍醐味である。大学で語り合い、議論した友人が著者になる日も来るかもしれない。講義などに限らず聞きたいことがあるときに私を反面教師に機会を逃さないように。知の出会いの場でもある大学というフィールドでもぜひ色々な書物に触れ、人と対話し、フィールドワークをして欲しい。

国際人権関連の推薦書等：

- ・申恵丰『国際人権入門』岩波書店、2020年。
- ・法務省『人権白書』各年。
- ・Sphere Association『人道憲章と人道対応に関する最低基準（スフィア基準）』2018。

推薦： 杉本 めぐみ（准教授/未来共創センター）

エマニュエル・サンテリ

『現代フランスにおける移民の子孫たち』

都市・社会統合・アイデンティティの社会学』

(明石書店 2019 年)

私の関心は、公教育がどれくらいマイノリティにも開かれた教育制度となっているかにある。なかでも日本とフランスの比較から、課題を抽出することを心がけてきた。

本書は、フランスの女性移民研究者として広く知られたサンテリ氏の翻訳書である。主にフランス語圏（欧米）の高校生から大学生向けに書かれた教科書である。フランスの戦後移民研究の成果をコンパクトに整理したものである。フランスは、アフリカを中心とする植民地から大量に人を受入れ、1970 年代オイルショックまでは労働者として歓迎してきた経緯がある。本書のタイトルに現れているように、ここではその子孫たち（フランス生まれの第 2 世代以降）に光を当てることで、移民の受入れ政策の課題を明らかにした点が、特徴となっている。本書のキーワードは、子孫、郊外、排除、学校、就労、家族、宗教、市民権などとなっている。また移民子孫の生まれてから家族を営むまでの経路に注目したところにも、フランスの移民研究の特徴がある。フランスは人口統計学の伝統があり、こうした追跡（同世代のパネル）調査の世代間比較も含めてデータの豊富な国である。

学校教育制度の特徴を知することは大切なことであるが、マイ

ノリティ研究においては同様にマイノリティのマクロデータの動向を知ることと、その動態をマジョリティと比較しながら、分析することは、実は、マジョリティの教育制度の課題を見出すのにも参考になる。

なぜ、フランスにおけるマイノリティの学歴、就職などには、マジョリティと異なる結果が生じるのか。その差異は、フランスに固有なのか、国際的に共通した社会構造に課題があるのか。ひいては、日本にも同様の結果があるか、ないか検証する価値はあるだろうか。コロナ禍であるからこそ、読書を通じて一度海外に飛び出てみて、日本の実態を考えてみてはどうだろうか。

推薦： 園山 大祐（教授／教育学系）

角岡 伸彦

『はじめての部落問題』

(文藝春秋 2005 年)

等身大の部落と出会うための一冊である。本書にはこんな一節がある。

部落にも「喜怒哀楽」がある。部落民だからといって、いつも怒ったり哀しんだりしているわけではない。ところがこれまでは「怒」と「哀」ばかりが伝えられてきた。「喜」や「楽」も伝えるべきではないかと私は考えていた。(163 頁)

皆さんの中には、道德の授業やホームルームなどで部落問題を教わった人がいると思う。歴史の授業で江戸時代の身分制について学んだ人もいるだろう。でも、「何だか暗い話だな」と感じたことはなかっただろうか。「今も部落差別があるのか知りたい」と思ったことはなかっただろうか。「知らない人にわざわざ教える必要はない」と反発したことはなかっただろうか。そんな人たちにこそ読んでほしい本である。

本書は、第1章「部落ってなに？」以下6章からなる。どの章から読んでもかまわないが、第5章「部落問題をなぜ学ぶのか」は特にじっくり読んでほしい。著者はかつて大阪大学で「部落問題論」という授業の非常勤講師をしていた。この章には、授業を

うけた学生の声がたくさんのもっている。ぜひ、先輩の考えに接して、自分の部落問題認識をふりかえてみてほしい。この章には、部落の「喜」や「楽」を伝えるため、部落の伝統食を授業で振る舞った話ものもっている。部落にアポなし取材をしてレポートを書いた学生の話ものもっている。社会問題を考えるときには、頭の柔らかさと腰の軽さも必要だ。

大学では色々な出会いがある。ある出会いが一生を左右することになるかもしれない。私の場合、「部落解放研究会」というサークルに入り、部落出身の学生と出会ったことが、大げさにいうと、人生の転機になった。部落出身ではない者に部落問題を考える「資格」があるのかと悩んだこともあった。だが、大事なのは生き方であって生まれではない。そう考えて研究者の道を選んだ。そして今も部落問題や同和教育の研究をしている。

別に研究者になれとすすめているわけではない。だが、皆さんには、部落問題との出会いを通じて、社会のあり方や自分の生き方に目を向けてほしいと願っている。本書は、きっと、その手がかりになる。

推薦： 高田 一宏（教授／教育学系）

居場所カフェ立ち上げプロジェクト 『学校に居場所カフェをつくろう！ ——生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』 (明石書店 2019 年)

みなさんは「居場所」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか。特定の場所、人、心の拠りどころを思い浮かべたでしょうか。みなさんの中には、学校が居場所だった方も、あるいは学校の中に居場所が見つけづらかった方もいるかもしれません。

この本は、学校内にカフェができれば、学校を居場所にできる子どもや大人が増えて、地域がもっと豊かに変わるのではないかととの問題意識から、学校内だけど学校でもない、固定の人間関係や緊張状態から離れることができる場としてのサードプレイス

「居場所カフェ」の設立の背景が書かれています。また、全国にある「居場所カフェ」の開設の仕方、運営、高校との連携、各地の「居場所カフェ」の実践例などを紹介しています。カフェとこの名前の通り、各地ともお菓子とジュースやお茶、ホットドリンク等が無料で用意されています。高校、地域、行政などそれぞれの立場から、高校生が安心して過ごすことができる居場所づくりについての取り組みが書かれています。

以前、わたしは大阪府立西成高校の校内居場所カフェ「となりカフェ」に参加したことがあります。参加した時期は1月最初の

開室日で、とても寒い日でした。わたしはドリンクを用意するコーナーの担当としてお湯を沸かしたり、紙コップを並べたりと開室の準備をしていました。来室した一人ひとりに「こんにちは！飲み物は何にする？」と声をかけて始まるコミュニケーションは、教師でもない、またお店の店員でもない、いわゆる「学校」っぽくない場所「となりカフェ」ならではのかわり方でした。その日は甘酒（ノンアルコール）も用意されていたので「今日のスペシャルドリンク甘酒です」と書いておくと、「今日甘酒あるんやあ！」「甘酒って飲んだことないわあ」と話しながらドリンクコーナーに来たり、甘酒を用意していると「このにおいなんなん？お酒？」と聞いてくれたりして、「一口飲んでみようかな、ちょっとちょうだい」「それ何飲んでんの？」などと自然と「となりカフェ」にいる人たちの中で会話が広がっていく様子がありました。安心できる場所で、初めて参加したわたしも「となりカフェ」にいる人として過ごせました。

家庭でも学校やバイトなど緊張状態に包まれる子どもたちが、気楽に立ち寄れて、教師とは違う人々と触れ合うことで緊張を解きほぐし、安心してそこにいることができる場所「居場所カフェ」。この本に書かれている社会的背景も含めて、みなさんにとっての「居場所」、となりのあの子にとっての「居場所」について考えてみてはいかがでしょうか。

推薦： 玉城 明子（准教授／教育学系・教職課程）

ピエール・ブルデュー 石井洋次郎訳

『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』

—社会的判断力批判—

(藤原書店 1990 年)

学問や学術は、何やら難しいものを扱っていて自分の生活からは遠いものだ。私にとって大学生活は、そういった自分の学問に対するイメージをじわじわと壊していくようなものだった。

なぜ自分はアルバイトをしてまで高い服を買っているのか。気の合うと友人と合わない友人はなにが違うのか。父はなぜ失業してアルコール依存症になったのか。母が毎日私に愚痴ばかり言うのはなぜなのか。地元の友だちにフリーターやニートが多いのはどうしてか。自分が大学生活にいまいち馴染めないのはどうしてか。大学生の私にとって切実だったこのような問題群は、言葉を与えられることなく、私の中に断片的にちらばっていた。そうした日常の悩みや苦悩を言語化し向き合うためのアイデアや考え方を与えてくれたのが社会学だった。

正直、たくさんの本を読んだり人と議論したりすることを通じて社会学が身体に染み込んできたというようなものなので、どれか一冊を選ぶというのは非常に難しい。それでも一冊を選べと言われたら、「私の一冊」はフランスの社会学者ブルデューの『ディスタンクシオン』である。哲学者を志していたブルデューは、ア

ルジェリア戦争での兵役経験を経て社会調査の重要性に気づく。そしてアルジェリア社会を対象に民族学的研究を行った後、フランスに戻って、自らの社会、すなわちフランス社会を対象に経験的研究を行うようになった。その一つの到達点が『ディスタンクシオン』だ。本書で展開されるのは、趣味（英語でいうところの taste）についての分析である。誰がどんな本を読むのか。誰がどんな音楽を聴くのか。映画館に行く人は誰か。インテリアやファッションにこだわるのは誰か。俳優の名前を多く知っている人は誰で、映画監督の名前を多く知っている人は誰か。そこに年齢や学歴、職業といった社会的属性はどのように関わっているのか。フィールドワーク、インタビュー、質問紙調査、大衆雑誌の切り抜きなど、さまざまな素材を対象に多面的な分析を行う。そしてそこから見出された、一見相互に関連していなさそうな数多くの知見をつなぎ、体系的な説明を与えていく。

決して読みやすい本とは言えない。その意味では初学者向きの本ではない。しかし社会学の広がりや奥行きを知るために、何よりも社会学的想像力を身につけるために読む本としては最高の一冊だ（上巻・下巻なので正確には二冊だが……）。ブルデューの思考をなぞるように、時には原著や英訳と照らし合わせながらゆっくり丁寧に読んでほしい。

推薦： 知念 渉（准教授／教育学系）

ジョン・スチュアート・ミル

『自由論』

(光文社古典新訳文庫 2012 年)

近年、メディア関係者やメディア研究者のあいだでは、表現・言論・報道の自由をめぐる問題がしばしばクローズアップされる。2013 年に成立した特定秘密保護法は、報道の自由を制約する面をもつ。2016 年には総務大臣が放送法・電波法を根拠に、政府が放送局に対して電波停止を命じる可能性に言及し、議論になった。これらがなぜ問題になるかは、まだわかりやすいかもしれない。では、次のような例はどうだろうか？

日本では（日本以外の国でもそうだが）民族差別的なヘイトスピーチが大きな社会問題になり、2016 年の国会で通称「ヘイトスピーチ解消法」が成立、施行された。ただ、現行法は罰則規定等のない理念法であるため、さらに強い規制を求める声もある。むろん民族差別は許されるべきことではない。しかし、ヘイトスピーチの法的規制およびその強化に対しては、憲法 21 条の保障する表現の自由の観点から慎重論・反対論も唱えられている。はたしてそれは正しいことなのだろうか？ 表現の自由を守るためには、民族差別的な「ことばの凶器」をふりかざす自由まで、私たちは認めなければならないのだろうか？

私は社会学者としてこうした問題を研究しているが、答えは容易に出せるものではない。問題を考えるにあたって、まず理解す

べきは、なぜそれほど——差別的表現・発言についてさえ、その法的規制には慎重にならざるをえないほど——「表現の自由」が重要とされるのか、だ。イギリスの思想家 J.S.ミルの『自由論』は、その重要さをていねいに筋道立てて論じている。19 世紀に書かれた著作だが、内容は今も色あせていない。日本語訳はいくつかあるが、光文社古典新訳文庫版（斉藤悦則訳、2012 年出版）が読みやすい。英語原文ならネットで無料で読めるので、英語が得意な人はぜひ挑戦してみてほしい。

ただこれだけを読んでも、なぜミル（や当時の人びと）が表現の自由を擁護するために大きな情熱を傾けたのかは、ピンとこないかもしれない。その背景には、血で血を争う宗教対立に彩られた西欧の歴史がある。自らの信仰や思想を絶対視し、それに反する考えを表明する自由を認めなかったがゆえに、凄惨な事態をもたらした歴史への反省がある。高校の世界史の教科書を読み直してほしい（津野田興一『やりなおし高校世界史』ちくま新書もよい本だ）。歴史は過去に終わったことではなく、現在につながっている。歴史に学ぶことなくして、私たちの社会で今起きていることを真の意味で理解することはできない。

推薦： 辻 大介（教授／社会学・人間学系）

上橋 菜穂子 『狐笛のかなた』

(文庫版：新潮社 2006 年)
(単行本版：理論社 2003 年)

本書は、2004 年に第 42 回野間児童文芸賞を受賞した児童文学である。「りょうりょうと風が吹き渡る夕暮れの野を、まるで火が走るように、赤い毛なみを光らせて、一匹の子狐が駆けていた。」何層ものピンク色と朱色で染まった空と野の中を、赤い一本の線のようなものが走り抜ける姿がまざまざと目に浮かぶ。私は、冒頭のこの一文を読んで物語に引き込まれた。

本書は、人の心の声を聞くことができる能力を生まれながらに持った少女と、「呪者の使い魔にされた霊狐」である子狐、そしてもう一人の少年を取り巻く物語であり、恋物語という一面も持つ。舞台は、江戸時代を彷彿とさせる架空の国である。国同士の争いとそれぞれの思惑の中で翻弄されながらも、懸命に生きる少女や少年たちの姿に、胸がぎゅうっと締め付けられる。

本書の著者は、2014 年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞した上橋菜穂子氏である。上橋氏は作家であるが、研究者でもある。川村学園女子大学特任教授として、文化人類学の観点から、オーストラリアの先住民族アボリジニをテーマに研究を行っている。

彼女の作品の特徴は、物語の本筋に関わるかどうかに関係なく、すべての登場人物を一人の人間（ときには人ではない何か）として、それぞれ丁寧に魅力的に描くことであると思う。また、人と

自然とのつながりや共生、食に関する描写も物語を彩る。(余談だが、彼女の代表作の1つである「精霊の守り人」シリーズでは料理本も出ている。)

他方、私の専門は国際法学である。人権の国際的な保障の観点から、人権条約の条文解釈や国連の人権保障制度の実行などの分析を行う。主な研究テーマは、被災者の権利保障や人道支援、国内避難民の保護などである。

人権と聞いて何を想像するだろうか？人権とは、人間の尊厳を前提し、すべての人は、一人の例外もなく、一人ひとりが人であるということだけで、かけがえのない尊い大切な存在であるということである。誰にでも、いつでも、どこでも、同じ人権がある。人権というものを研究しているからこそ、登場人物一人一人に向き合い、ときに寄り添いながら物語を描く上橋作品に惹かれるのかもしれない。文化人類学に関心がある人も、ファンタジー小説が好きな人も、そうでない人も、一人の人間を、丁寧に、そして優しく描き出す上橋氏の作品をおすすめしたい。

推薦： 徳永 恵美香（講師／未来共創センター）

熊田 孝恒

『商品開発のための心理学』

(勁草書房 2015 年)

皆さんは心理学という学問にどのようなイメージを持っているだろうか。臨床心理学や教育心理学などのイメージを抱く人が多いのではないか。こうした現場に近い心理学の研究分野は、伝統的に応用分野と呼ばれ、そうでない分野は基礎分野と呼ばれている。馴染みが薄いであろう基礎分野を簡単に紹介すると、人間の認知や行動などに関わる心の基礎的な特性を主に実験によって明らかにしようとする分野である。実験者が設定した条件のもとで実験参加者の反応（反応時間や正答率など）を計測し、条件間の差をもとに、その背後にある心的過程の解明を目指すのである。

基礎研究では、実験に余計な影響を及ぼしそうな要因は排除され、実験者が明らかにしたい要因の影響だけを慎重に検討することとなる。また、ランダムに選ばれた実験参加者の結果を平均化することで個人差を相殺し、人間全体に一般化できる心の法則を見出そうとする。こうした方法論は、科学としての心理学に必要なが、世の中の複雑な問題に対する具体的解決策を提示するには十分ではない。人間全体における広く普遍的な心の法則を解明したとしても、その知見を実験室外での問題にどの程度適用可能か分からないためである（これを「生態学的妥当性」の問題と

言う)。また、年代や性別といった個人属性、さらには個人が育ってきた環境や嗜好などの個人差は、基礎分野の研究では「ノイズ」として排除されるが、現場の問題を解決するに当たっては、考慮すべき重要な要因である。

本書では、こうした基礎と応用の隔たりに対して、基礎分野の心理学者がどのようにアプローチできるのか紹介されている。自動車や家電製品、駅の案内表示、接客サービスなどに心理学がどのように活かされているかを知ることができる。人間科学部には、心理学の研究室がたくさんあるが、扱っている領域は基礎から応用まで幅広い。私は交通安全や学校安全が専門であるため、実践的な応用研究を中心とするが、基礎と応用のバランスは非常に重要だと考えている。本書をきっかけに、皆さんにもぜひ基礎と応用の関係性（どちらが優れているというものではない）に目を向けてもらいたい。そして、応用分野であっても基礎を押さえ、逆に基礎分野であっても応用を視野に入れた研究をしてもらいたい。

推薦： 中井 宏（准教授／行動学系）

ノーラ・エレン・グロース（佐野 正信 訳）

『みんなが手話で話した島』

（早川書房 2022 年）

私は日本で暮らす移住者の方々との対話を通して、社会の周縁に追いやられた人々の生活の実態とそれに抗おうとする苦悩や理不尽さについて聞かされては、共生社会の実現を阻む社会課題の深刻さとその解決の難しさ、自身の無力さについて思い知らされてきました。それと同時に「共生」に対するモヤモヤも強くなっていました。そんな中、ある移住者が、そのモヤモヤの答えはろう者の親を持つコーダ（Children of deaf adult/s）としての私自身の経験にあるのではないかと気づかせてくださいました。

みなさんは、聴覚障害者と一緒に何かすることになった場合、何を感じ、何をしようと思うのでしょうか。話が通じるのかな。手話通訳のサービスを利用しようか。筆談を取り入れればいいのかも知れない。この際手話を学んでみようか。そのようなことを思い浮かべるのではないかと思います。障害は社会の中にあるという障害の社会モデルに基づき、そこにある障害を取り除くための行動を起こすことは賛同されるべきことです。しかし、本当にそれだけでいいのかというと、やはりまだモヤモヤが残ります。

このモヤモヤを晴らすヒントを与えてくれた本の1つが、医療人類学者グロースの著書『みんなが手話で話した島』でした。これは記録文書や島民のオーラルヒストリーをもとに記されたアメ

リカのマサチューセッツ州にあるマーサズ・ヴィンヤード島の話です。この島では、聞こえる、聞こえないに関係なく、住民の間で共有されている手話がコミュニケーションの言葉の1つとして用いられていました。そして、この島のろう者は当時のアメリカ本土のろう者とは異なり、教育を受け、家族を設け、政治に参加するなど、地域社会に溶け込み、コアメンバーとして活躍することもあったそうです。

この本の帯には「あの人たちにハンディキャップなんてなかったですよ。ただ聾というだけでした」という島民の言葉が書かれています。今の社会は、改善されつつあるとはいえ、聴覚障害が人々を分け隔て、分断をも維持するような社会であると言えます。そんな社会に対して、この言葉は、共通の言語を持つことによって同じ地域社会を同じように生きる、ただそれだけのことの中に共生の鍵があるのではないか？というメッセージを投げかけているように感じられます。

この本は、共生社会の実現の根本となることばとことばの活動だけではなく、フィールド調査をはじめとする研究手法を考える上でもさまざまな論点を提供してくれるのではないかと思います。ことばの活動が障害や共生を考える上でいかに重要なのか、ぜひ、この本を手にしていただき、共生社会の実現の糸口を見つけるべく、皆さんとの対話の実現できたらいいなと思っています。

推薦： 中井 好男（准教授／共生学系）

ディヴィッド・スノウドン 藤井留美訳

『100歳の美しい脳』

—アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち—

(DHC 2004 年)

この本では、678 人の修道女を 1986 年から 20 年以上にわたって追跡したナン（英語で修道女を意味します）・スタディから明らかになった結果を、この研究を始めた研究者自身が紹介しています。

ナン・スタディの主な目的は、人生の後半における脳の健康と記憶や判断といった認知機能に、人生の前半における経験や活動（たとえば、教育歴や趣味）がどのような影響を及ぼすかを明らかにすることにありました。この研究に協力した修道女たちは、10 代から 30 代の間に信徒になってから 70 代以降に研究に参加するまでに教会に保管された記録を提供するとともに、研究に参加してから亡くなるまで、言葉を記憶したり計算したりする検査に回答しました。さらに一部の方々は死後に自らの脳を提供しました。

ナン・スタディの主な結果を体現する研究参加者として、101 歳で亡くなったシスター・メアリーが描かれています。彼女は、亡くなる 8 か月前まで認知機能検査の得点を高く保ち、認知機能

に障害が生じて日常生活に支障を来す認知症という病気にかかっていないと評価されていました。しかし、死後に彼女の脳を解剖した結果、驚くべきことがわかりました。認知症を引き起こす最も一般的な病気として知られているアルツハイマー病に認められる老人斑と呼ばれるシミが彼女の脳に生じていたのです。

シスター・メアリーは、長生きしても人は認知機能を良好に保つことができるという結果を初めて示した人ではありませんでしたが、アルツハイマー病の兆候を脳に示しながらも人は認知機能を良好に保つことができるという結果を初めて示した人でした。

ただ、近年では、『アルツハイマー病研究、失敗の構造』（みすず書房 2023年）という本で、老人斑と呼ばれるシミはアルツハイマー病の原因ではないという結果が示され、過去数十年間にわたって蓄積されてきた研究の前提が揺るがされていることが告発されています。

『100歳の美しい脳』には、人の生涯にわたる変化を明らかにしようとする生涯発達心理学と呼ばれる学問分野の醍醐味が散りばめられています。誰かの人生を理解すること、未知の発見をすることの不思議さや面白さと同時に、研究に協力してくれた方々の信頼に応えることの大切さも感じ取っていただけたら嬉しいのです。

推薦： 中川 威（准教授／行動学系）

篠田 謙一 監修

『ホモ・サピエンスの誕生と拡散』

(洋泉社(歴史新書) 2017 年)

生物人類学という研究分野における最大の目的はヒトという存在が地球の歴史において成立してきた過程、いわゆる人類進化の道筋を生物学的な立場から明らかにすることである。この点は人間科学という学問が様々な角度からヒトとは何かを理解しようとするものであるとすれば、その基本的な部分を占めているともいえるかもしれない。

しかしながら、こうした研究は多くが化石研究や霊長類を中心とした現生動物種との比較といった基礎的研究であり、そのため人類の歴史について新たな知見を付け加えるには多くの時間と労力が必要とされ、この分野に関する書籍はそれほど多く見られるわけではなかった。

ところが、この1, 2年の間に、次々と生物人類学や人類進化に関する国内外の書籍が書店の生物学コーナーに並ぶようになり、その内容も非常にバラエティに富んだものとなっている。これには、DNA 分析などの新たな研究方法の発展や化石の新発見ということも関連しているが、それよりもむしろ、グローバリゼーションが進み、多様な文化や生活様式についての情報や理解が深まり、地球全体に視野を広げた思考が一般的となってきたこと、さらには、そうした様々な地域における環境や風土に適応した人

類の多様性が注目されてきたからではないだろうか。そして、ヒトの適応過程とそれをもたらした環境変化などの要因の関連性を知ることから、よりよいヒトと環境との関係を構築するための知見を得ることが求められているのである。

さて、そうした書籍については専門的な内容のものが少なくないが、ここであげたものは、初期人類から現代人までの人類進化の流れが専門外の読者にもわかりやすくまとめられている。化石、DNA、考古学的研究などから、進化の過程が順序立てて説明されており、現生人類（ホモ・サピエンス）が地球全体へ拡散した要因、さらには日本人の成立まで興味深く記されている。詳細な専門的内容を期待する人には物足りないかもしれないが、人間を研究対象としていく上での基礎的な知識を得るには好適な一冊であると考えてる。

推薦： 中野 良彦（准教授／行動学系）

稲垣 佳世子、波多野 誼余夫

『人はいかに学ぶか—日常的認知の世界』

(中央公論社 1989 年)

20年以上前、私も皆さんと同じ人間科学部の1年生であった。まぐれで合格してしまった私は、圧倒的な学力不足に直面していた。タイトルには興味ひかれるのに、5分についていけなくなる授業に消耗し、頭の回転が早く、知識も豊富で、物腰も生活も大人な学友たちの迫力から自分を守るのに必死な日々だった。ただまあ真面目というか気弱であったので、ギリギリ卒業できるケモノミチを探し当てるような心持ちで授業を選び、出席を続け、なんとか進級し、教育学の研究室に拾ってもらったのだが、その頃にはもう「人間科学」は半ばあきらめていた。卒業さえできればいいや、が本音だった。

そんな時に読む機会があったのが、今回の1冊である。著者らは、認知科学、特に学習に関わる心理学では大変著名で、本書では、人が学校とは違い、日常では「必要」を超えていきいきと学ぶ存在であることを、興味深い研究事例を紹介しながら、論じていく。

当時の私は素っ裸にされるような気持ちで読んだ。高校では入試で点がとれるか、大学では単位がとれるかどうかという点で、その知識が必要かを判断してしまう癖がついていたせいで、ずいぶんと貧しい場所に流されていた自分が見えた。一方で、あら、

そういえばサークルでやっている演劇のことだと、このところかなり詳しくなったし、いくらでも知識を吸収したいと思っているんじゃないか。それに面白そうと思う授業があるなら、まだ大学で学びたい気持ちが残っているんだろう。楽しんで学習を続ければ、ちょっとはなりたい自分に近づけるんじゃないかと、自分の中に確かな部位を見つけた気になった。

本書の論考は、教育のあり方を提言するものだけれど、読者自身を学習に対して前向きにさせる副作用を持つ。かくして私は人間科学をあきらめるのをやめにしたのだった。

副作用の強すぎた私は、この学問を修めたら、学習の秘儀が身について、とても賢くなれるのではないだろうかなどと錯誤して（実際、そうはいきませんでした）、大学院に進んでしまう。私の研究分野である教育工学とは、学習や人間に関する人間科学の理論や知見を何でも活用して、人の学習を成功に導くような授業や教材を実現しようという大胆なたくらみをもった学問である。詳しくは授業でお会いした時に。

推薦： 西森 年寿（教授／教育学系）

金出 武雄

『独創はひらめかない』

—「素人発想、玄人実行」の法則』

(日本経済新聞出版社 2012 年)

科学者というのは、頭をいっぱい使って複雑なことに取り組んでいる人というイメージがある。でも、彼らが目指しているのは、本当は「シンプルさ」である。複雑なことを複雑なまま扱うのではなく、少し単純すぎるかなというくらいにシンプルに解き明かしてみせる。シンプルにすることで、人を動かす力が出てくる。それぞれの人が「自分にもできそうだ」「自分ならこうする」と自由に発想できるようになる。その種をまくことのできる人が優れた科学者であり、この本の著者は間違いなくその一人だ。

金出武雄先生は、1945 年生まれのコンピュータ科学者で、カーネギーメロン大学教授。人工知能による視覚やロボット研究における世界的権威である。この本には、アメリカで 30 年以上の研究生活を送るなかで得たノウハウや視点が、惜しげもなく語られている。タイトルになっている「素人発想、玄人実行（素人のように考え、玄人として実行する）」は、多くの事例から確信した研究開発の秘訣であるという。発想は、素人のように単純、素直、自由、簡単でなければならない。でも、それを実現するには、玄人としての知識や技術が必要である。その両方が欠かせない。

読みやすいエッセイではあるが、この内容は著者にしか書けな

い。たとえば、日本から講演のためにやってきた若い企業技術者にアドバイスする場面がある。「用意したスライドを後ろから逆に使ったらいい。」日本では、研究の背景から現状、方法などを順に説明するのがよいと教えられる。でも、せっかちなアメリカ人なら途中で帰ってしまう。そこで、いつ帰ってもいいように、よいスライドから順番に使え（ベストファースト）と助言したのである。その研究で何が分かったのか何ができたのかという結論を最初に伝える。結論がつまらなければ、聞く意味がない。結論が面白ければ、どうしてそこにたどりついたのかという謎解きを、興味深々で聞くことになるだろう。

他にも、名言がいくつも出てくる。「解く価値のある問題を探せ」「アイデアは人に盗まれない」「構想力とは問題を限定する能力である」。こうやって書いているだけで、わくわくしてくるし、前向きな気持ちになってくる。私が、現在「かわいい」に関する実験心理学的な研究を行っているのも、このような姿勢に深く感銘を受けたからである。

新入生のみなさん、学問の入り口に立った今だからこそ、ぜひシンプルに考え、解く価値のある問題を探してください。この本には、そのためのヒントがたくさん詰まっています。

推薦： 入戸野 宏（教授／行動学系）

永井 均

『マンガは哲学する』

(岩波現代文庫 2009 年)

人間は何のために生きているのだろうか。世界はなぜ何のために存在するのだろうか。

ふとした瞬間に、こういう疑問をもったことのある人は、じつは自分でも気づかないうちに「哲学」の入り口へと近づいている。本書は、日本のマンガ作品の中に哲学への入り口が豊富に隠れていることを教えてくれる良書で、マンガによる哲学入門書だ。しかもこれほど質の高い哲学の入門書は、めったにない。この本を手にとれば、藤子・F・不二雄や吉田戦車、永井豪などマンガの名作に触れながら、人間存在の不思議について考えていくことができるので、学生 みなさんにお勧めである。私が豊中キャンパスで担当する「人間学の話題（哲学から見る心の世界）」でも教科書として指定している。

さて永井均さんの『マンガは哲学する』は、人間や世界に対する不思議の世界へと誘ってくれるとても優れた書物だが、答えは与えてくれない。その不思議がどこから私たちのところにやって来るのかに答えるためには、じつは哲学だけでは不足で、社会理論や表象文化論もあわせて考えていく営みが必要になってくる。近代社会の構造や、その中における文化表現の位置について把握する必要があるのだ。そうすることで、社会の構造や歴史の

流れの中にある個人の意識の運命を捉えることができるようになってくる。

私の授業ではマンガやアニメをよく素材として取り上げる。それにはちゃんとした理由があって、米国の思想家F・ジェイムソンが「文化表現とは現実における解決不可能な矛盾の想像的解決であり、それを分析することで、個人の経験から社会の構造の把握へとさかのぼることができる」と言っていることに依拠している。

みなさんの中にも、現代のマンガやアニメ作品に魅かれる人は多いだろう。ついついたくさん観てしまうという人もいるかも知れない。そのことには、ちゃんとした理由があると言うことを、近現代の哲学、社会理論、精神分析、表象文化論などを組み合わせれば、明らかにすることができると私は考えていて、研究テーマの一つとしている。私が担当する比較文明論や文明動態学といった分野では、このような手法で個人の意識が抱える問題から遡行して、私たちの生きる社会のもつ動態的な構造へとアプローチし、今後の運命を考えていく。ただアニメやマンガを「観る」ことが好きであれば、それだけでもいい。でもそこから人間や社会のことを「考えてみたい」と思ったら、本書が最初の一步になるだろう。ぜひ手に取ってみてほしい。

推薦： 野尻 英一（准教授／社会学・人間学系）

ジェローム・ブルーナー

『意味の復権ーフォークサイコロジーに向けてー』

(ミネルヴァ書房 1999 年)

「保育園落ちた日本死ね!!!」と題された匿名のブログがきっかけで、政府は保育の受け皿を増やす方向へ動き始めました(『朝日新聞』2016年3月24日朝刊)。このブログが国会で取り上げられた時、首相は、真偽を確かめられないと答弁するに留まりました。ところがその後、「保育園落ちたの私だ」と書いた紙を掲げる母親らが国会前で集まるまでに至り、政府もいよいよ重い腰を上げたようです。

発端は、一人の母親が、我が子の保育所入所の選に漏れたことを怒って、ネット上に綴った書き込みです。批判もあるにせよ、それが人々の共感を呼び、政策に反映されたのです。その一方、定期的に政府が発表する保育所の待機児童数は、5年ぶりの増加を既に示していました。こうした公的な統計がありながらも、センセーショナルで私的な物語(ストーリー)が、政府や世論を動かしたとも言えるでしょう。実は、このように、一つの事例に表れた物語が、社会を動かした例は少なくありません。

では、なぜ、物語は人や社会を動かすのでしょうか。本書の著者は、物語によって生まれる「意味」に注目し、この疑問に答えようとします。本書によれば、自分の経験がどのような意味を持つのかを教えてくれるのは、経験を順序立てたり理由づけたりし

た物語です。自分の物語は、幼い頃から親に語りかけられたり、絵本に接したりする中で、社会や文化の物語から取り込まれながら、生成されます。その一方、自分の物語が発信されれば、社会や文化の物語として流布する可能性もあります。つまり、「意味」を付与する働きをもつ物語は、個人と社会・文化との間でやり取りされて、影響力を発揮するというわけです。

著者によれば、心理療法やカウンセリングは、自分についての新しい物語の創造です。自分についての物語が変われば、過去の思い出し方や、現在の振る舞い方、未来の見通し方も変わる。私自身は、心理療法やカウンセリングで起きていることを、こうした自分についての物語の再編という視点から読み解くと共に、一人一人に応じた実践方法を作り出そうとしています。

ところで、本書の著者は100歳で亡くなりました。60代で早々と自伝を書きましたが、もしも2冊目を書いていたら、また少し違った自伝になっていたかもしれません。彼の自伝、いわば私的なストーリーは、ほとんど現代心理学のヒストリーです。「保育園落ちた～」の母親は、将来、子育てが一段落したらどんなふうに当時を振り返るのでしょうか。

推薦： 野村 晴夫（教授／教育学系）

アーシュラ・K・ル＝グウィン（谷垣 暁美 訳）

『ギフト 西のはての年代記 I』

（河出書房新社 2006 年、文庫版 2011 年）

ゲド戦記や SF 小説などで知られるル＝グウィンによる 3 部作の第 1 巻である。文化人類学者の父と作家の母の影響を受けて育った著者が晩年に執筆した作品は人間科学の観点からも興味深いテーマを扱っている。

『ギフト』の原題は複数形の Gifts であり「さまざまなギフト」を指す。ここで描かれるギフトは、「天賦の才能」でもあり、「贈り物」でもある。

物語の舞台は架空の国である「西のはて」北方の荒涼とした高地である。代々続く特殊能力を継承する家系の息子である主人公のオレックは、父親からその能力の発現を期待される。彼の家系に伝わる能力は、視線により物事を元の状態に「もどす」能力であり、生き物であればその生命を破壊する力にもなる。オレックは能力を制御することができないと考え自らの目を覆って 3 年の月日を過ごす。父親は高地での勢力抗争、家系の地位と権威の維持を賭けて息子の存在を操作しようとする。特殊能力とその継承、権力争い、威圧と交渉による力のせめぎ合いの状況が、背景に描かれる。著者ル＝グウィンは、奴隷制や略奪などの不条理も含めて社会の現実を提示しつつ、主人公の生き方の模索を描いていく。やがて少年オレックは期待された能力を持たないことを悟

り、亡き母から受け継いだ別の能力、物語を記し読み語る力を携えて、親友の少女グライと共に高地を後にする。グライもまた自らの能力を活かす新たな道を模索する。

この物語は、少年をめぐる能力の継承と人生の模索が一つの社会関係の中に位置づけられながら展開する構成をとる。架空の物語でありながら著者ル＝グウィンによる社会の現実に対する優れた洞察力が示される。高地社会の詳細な描写に加えて、社会の外部からもたらされる力や存在の意味、人間の力の発揮されるべき方向性など、現代の社会を考える際にも重要な課題の多くがちりばめられている。登場人物たちの詳細で活力ある描写も物語に厚みを加える。書かれた小説の形態をとりつつ、人間の紡ぎだす言葉や人間が発する声の重要性にも注目したこの作品は、叙事詩と芸能との関連を探求する私自身にとっても示唆的である。

異世界ファンタジー小説の考察は、決して文学部の専門領域に限られるのではなく、人類学、社会学、哲学などの領域を含む人間科学部においても重要な研究領域である。この作品は社会における人間の位置づけ、力の不均衡、人間の創造性や自由の希求など人間科学の視点から分析する際の課題を多く提示する。

3部作の構成は、それぞれが独立した物語である一方で緩やかな関連性も見られる。どの巻からも読み始めることができるが、オレックとグライは他の作品にも登場して重要な役割を果たす。他の2作『ヴォイス』『パワー』と共に、読んでみることを推奨したい。

推薦： 福岡 まどか（教授／社会学・人間学系）

西平 直

『誕生のインファンティア—生まれてきた不思議、
死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議—』

(みすず書房 2015 年)

自分は死んだ後、どうなるのか。自分は生まれてくる前、どうだったのか。自分はなぜ生まれてきたのか。これらの問いに対する最終的な答えなど得られるはずもない。しかし、それにもかかわらず、我々は、これらの問いについて思いをめぐらす。その問いや思索は、我々の存在をときに根本で支え、ときに大きく揺るがすほどの非常に強い力を持つ。この著書は、これらの根本的な問いに、学生たちが、あるいは哲学者、心理学者、文学者やジャーナリストたちが、どのように向き合ってきたのか、向き合っているのかを豊富な実例から示してくれる。しかし、本書を読み進めていくにつれ、読者である我々自身もまた、すでに子ども時代にこれらの問いをめぐって思い悩んだことに、あるいは、ある時期からこれらの問いに封をしてきたにもかかわらず、今でもなおそれが自身の心の奥底に眠ったままであることに気づくことになるだろう。

著者は、本書のタイトルにもある「インファンティア」という語を、「子どもの頃感じた、言葉によって写し取ることのできない、在ることの不思議」という意味で用いている。存在の「不思議」をめぐる問いと思索は、我々自身の人生に関しても、教育学の学問的営みに関しても、クロスワードパズルに似たところがある。複数の語が交差する箇所にはっきりと空いた空白、それは我々自身の存在をめぐる問いである。その

周囲の空白は、個々人の生の歩みの中で、家庭や学校での経験によって、あるいは、教育や人間をめぐる学術的な議論を通じて徐々に埋められていくのかもしれない。「どうすれば学力を上げることができるのか」「どうすれば有名企業に就職できるのか」「どうすれば業績を上げることができるのか」。こうした問いもまた容易に答えられるものではないが、たとえ暫定的にでも答えを見出すことはできるだろう。こうして周囲の空白を埋めていけばいつかクロスする部分の空白を埋めることもできるだろうと高を括る。あるいは、今の自分が壊れてしまうかもしれないという危険を察し、この空白箇所から目を逸らそうとする。しかし、周囲の空白が埋まれば埋まる程、それとの対比で、ますますクロスする部分の空白が際立ってくる。いざその空白を埋めようとする、と、どれほど深く考えてみてもぴったりの文字を見出すことができない。そのつど違う文字を入れてみるのだが、その文字に連なるいくつかの語は意味をなしても、今度は意味をなさなくなる語が出てきてしまうのだ。

この著書は、たとえ答えを見つけることができないとしても、敢えてこの空白箇所をめぐって問い続けることの意味・重要性を示してくれる。その意味で本書は、教育哲学の入門書として最適の書と言えるが、誕生以前から死後までの、学校教育に限定されない人間形成全般を対象とする点に特徴をもつ教育人間学への入門書として特徴づけることもできる。

推薦： 藤川 信夫（教授／教育学系）

山田 風太郎

『人間臨終図巻 1～4<新装版>』

(徳間文庫 2011 年)

『私の 1 冊』を寄稿せよと言われて、研究者にしては読書量が少ないと自負している私ははたと困りました。研究上の必要に迫られて、心理学の専門書にはある程度目を通していますし、全作品を読んでいる作家(帯木蓬生)もいるのですが、この 1 冊となると…とやや逡巡した挙げ句、これまでの人生でもっとも読み返した回数が多い本を選ぶことにしました。

そこが心理学者としての原点なのかもしれない、と思いますが、私は、幼い頃から、死にまつわる様々なものに強く興味を惹かれます。墓地が大好きで、日本の大きな霊園は大抵訪れていますし、海外でも有名墓地はもちろんまったく無名の人々の墓地にもよく出かけ、いわゆる名所旧跡より長い時間を過ごすことも多いです。各地の戦跡を訪れるのも好きですし、アウシュヴィッツ＝ビルケナウなど欧州に点在する強制収容所跡にも何度も足を運んでいます。生きている人々に関わるのも好きですが、墓地や収容所つまり「死」を象徴する場所を媒介にして、過去には確かに生きていた人々に思いを馳せるのが大好きなのです。そんな私にとって実に味わい深いのが、この本です。

本書は、古今東西の著名人総勢 923 名の死に様が、没年の若い方から順に淡々と並べられている本です。死に至るまでの人生遍

路もある程度書かれています。つまり、私にとってみれば、「臨終」の描写を媒介として膨大な数の人々の生について考える機会を与えてくれる本なのです。著者の山田風太郎氏(1922-2001)は、一般には奇想天外なアイディアを用いるストーリーテラーとして知られています。この図巻はノンフィクションですが、人の死に様だけを集めるというアイディアは確かに奇想天外です。偉大な業績をなした人がそれにふさわしい威厳のある死を迎えた場合もあれば、まったくの頓死をする場合もあり、また世間の鼻つまみ者が必ず不幸な死に方をするわけでもなく、因果応報は必ずしも成り立っていません。「世の中は公正にできているはず」という素朴な信念(公正世界仮説)が揺るがされる思いがします。

私が購入したオリジナル版はずっしりと重い黒いハードカバーの函入2巻本で、物理的にも読み応えがあります。こちらでお読みになるのと文庫版とでは味わいが違うかもしれません。なお、著者没後に、本書の衣鉢を継ぐ新たな「図巻」として、関川夏央氏による『人間晩年図巻』(1990-94年と1995-1999年の2巻)が岩波書店から刊行されており、同じく2000年代編は同社Webマガジンで連載中です。

(<https://tanemaki.iwanami.co.jp/categories/59>)

推薦： 三浦 麻子(教授／行動学系)

上野 英信 『地の底の笑い話』

(岩波新書 1967 年)

かつて、筑豊の炭鉱労働者の中に「スカブラ」と呼ばれる人々がいた。その名の由来は「スカッとブラブラしている」からで、トレードマークは雪のように真っ白な手ぬぐいを首に巻いていること。坑夫の手ぬぐいは炭塵と汗で真っ黒になるはずだから、スカブラの手ぬぐいは、彼らがろくに仕事もしていない証拠だ。それならスカブラは何をしているかというと遊んでばかりいた。ある大スカブラは仕事にはやってくるけど全く働こうとしない。代わりに、彼がしているのは係員の詰め所に時間を聞きに行くこと。

他の坑夫が仕事にとりかかると、「もう何時になるやろかな。いっちょ時間を見にいったらやろう」と、すたすた詰所までのぼっていく。行ったらしばらくは帰ってこない。詰所で係員を相手にほら話を吹きまくっているからである。しばらくして現場に帰てくると、「おい、もう八時を過ぎちよるぞ。なんぼぐずぐずしよるな。憩うて一服せん」と、今度は坑夫を相手にほら話を吹く。みんなが仕事を始めると「もう何時になりよるやろかな。いっちょ、見にいったらやろう」とふたたび詰所に。この繰り返した。10人足らずの組でこんな怠け者が一人でもいると、彼の分まで働いてやらないといけないのだから大迷惑だ。ところが、スカブラは

不思議と嫌われていなかった。彼がいる日はどんどん仕事はかどったが、彼がいない日にはさっぱり能率が上がらなかった。だからスカブラは大変な人気者だった。

本書が描くのは過酷な炭鉱労働者の生活だ。しかし、死と隣り合わせの地の底で、彼らが交わしていたのは笑い話だったのだという。最も過酷な生の中に笑い話があったことを私たちはどのように受けとめることができるだろう。これからの日本社会は、これまでと全く逆の時代を迎える。人口減少は進み、経済も停滞、縮小していく。社会が右肩下がりになるだけでなく、気候変動の影響で毎年のように災害が起きたり、制御することが困難な感染症が何度もおそってくるだろう。はっきり言って、大変むずかしい時代を私たちは生きていくことになる。

このような時代を迎えるからこそ、私は人間にとって通常「生きるために必要」と考えられているものから「はみ出る」部分が大切になると思う。それが苦しい現実にあっても人間の尊厳を失わせない「よすが」になると思う。それは、笑い話かもしれないし、芸術かもしれないし、授業の間の休憩時間や、目的地の手前の駅で降りて歩いてみるようなことかもしれない。この「はみ出る」部分を豊かにもつような感覚を養うことが右肩下がりの社会を生きる術ではないか、本書はそんなヒントを地の底から私たちに届けてくれる。古い本ですが、挿絵も素晴らしいですし、図書館の「底」から掘り出すことをおすすめします。

推薦： 宮本 匠（准教授／共生学系）

ピエール＝ジル・ドジェンヌ

『科学は冒険！—科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ』 (講談社 1999 年)

著者であるド・ジェンヌ氏は、その画期的な業績ゆえに「現代フランスのニュートン」と呼ばれた。同氏は、高分子や液晶における分子運動、転移現象の類似性を発見し、それまでの物理学ではなし得なかった複雑な現象理解への道を開かれ、1991 年にノーベル物理学賞を受賞している。またパリ私立物理化学高等学院（マリー・キュリー氏他、多数の同賞受賞者を輩出）において、長きにわたり院長も務められた。

本書には、発明・発見は一夜にしてならず、時には失敗を繰り返しながらも独創性を重視し、やがて本質を見極めるべく一筋のひらめきに達する研究者の眼差しが鮮明に描かれている。また若い研究者が極端に基礎研究あるいは応用研究に偏るのを防ぐというように、同氏の教育者としての魅力も堪能できる。

私は、食品物性学から研究者の道を歩み始め、現在は環境問題を研究している。本書にはないが、私自身も若かりし頃にド・ジェンヌ氏から受け継いだ言葉があり、ここでご紹介したい。

- 1) Keep the spirit of Benjamin Franklin. 2) Observe nature.
- 3) Work with your hands. 4) Do simple experiments.

「ベンジャミン・フランクリンの素朴な精神、つまり気の利いた発想とお金のかからない方法で正確な実験結果を得ることが重要である。そのために広大な自然に目を投じること。莫大な費用、大組織・巨大装置を

求める研究を避け、身近なアイデアと工夫を凝らしながら事柄の『本質』を目指す研究を行うこと。シンプルな実験により自らの手を動かし、現象の背後に潜む本質を見抜くことが大切である。」

ド・ジェンヌ氏は、大学では量子力学を専攻し、初めての職は原子力研究所であり、その後は、固体物理学である磁性体・超伝導体研究へと移った。さらにはこれまでとは全く異質の「やわらかい物質」である液晶にも手を染めるようになり、高分子の絡み合いとゲル化、表面の濡れの現象、接着のメカニズム、界面科学、コロイド・高分子の物理学へと次々に領域を広げていった。このダイナミックな研究活動ゆえに、同氏は「チョウチョウのように飛び回っている研究者」と言われたこともあるようである。しかし、これほどまで広範囲な分野を扱えたのは、現象の本質を確実に見抜きつつ領域を超えて類推を広げてゆく柔軟な思考力に加え、温厚で飾らない人柄ゆえに優秀な研究者を結集するプロジェクトを創造できたからといえる。

さらに、同氏はノーベル賞受賞後にフランスから海外圏まで、高校生を対象とした講演の旅を行っており、本書にはその講演内容も収録されている。

この人間味溢れる偉人が、先端研究者として、他方で実践教育者として我々研究者に教示する提言は、私自身の心の支えでもあり、是非一読頂きたい一冊としてお勧めする。

推薦： 三好 恵真子（教授／行動学系）

上間 陽子

『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』

(太田出版 2017 年)

上間陽子の『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』(太田出版、2017)は、沖縄の性風俗で働く若い女性たちに寄り添った記録である。貧困そして親やパートナーからの「病院送りされるレベルでの」(p. 78)暴力が遍在する社会において、かなりの数の10代の女性たちが性風俗を足場にして生き延びていく。レイプそして、出産や人工妊娠中絶、ある人は子どもを捨てる経験をし、ある人はシングルマザーとして水商売で自立していく道を選び、風俗から足を洗って看護師になる女性も登場する。誰かがつながってくれていたときに女性たちは生き延びることができる。著者の上間陽子はこれらの女性が生き残ろうと努力する姿をさまざまな矛盾とともにしかし寄り添いつつ描いていく。

キャバクラの同僚である友人美羽に、DVのSOSを翼が求める場面を引いてみる。

美羽に「ごめん、(悠を)保育園送ってほしい」って(電話をかけたら)、「なんでか？」って。……美羽は気づいてるから。「おまえ、くるされた(=ひどくなくられること)のか？」って。[…]
まず、顔、見に来て、見たときに「はっ？」みたいな。「ひどくないか、ちょっとやり過ぎじゃないか？」って。

〔…〕翼の受けた傷は全治一か月の重傷で、マスクをしても顔の傷を隠すことができないものだった。美羽はそれから毎日、外に出られなくなった翼の代わりに、朝になると悠を保育園まで連れて行き、夕方になると夕食の買い物をして保育園に悠を無明けに行き、翼と一緒にご飯を食べる生活を一か月続ける。(p. 83)

ときには上間自身が少女の出産に立ち会うために夜中の高速を飛ばして分娩台に駆け付ける。何世代も続く貧困と暴力の反復が描かれるにもかかわらず、本書が陰鬱な印象を残さない理由は、誰かが手を差し伸べること、そして著者が逃げずに少女たちと向き合い続けること、そして少女たちに驚くべき生命力があることであろう。

私自身、大阪の西成地区でフィールドワークを始めるまで、このような境涯の人々のことを知らなかった。貧困、暴力、差別、病や障がいは見えにくいかもしれないが、実は身近なところに偏在している。これらは目を背けてはいけないう現実であるとともに、ここから出発することで新たな社会関係を描くことができる、おそらく唯一の出発点を示していると思われる。

(本稿はホンシエルジュに執筆した原稿に訂正を加えたものである。https://honcierge.jp/articles/shelf_story/1961)

推薦： 村上 靖彦（教授／社会学・人間学系）

Hugh Raffles

『Insectopedia』

(Pantheon 2010年)

本書は、「虫」についての「人類学」的な著作です。筆者の Hugh Raffles は、ニューヨークのニュースクール大学 (the New School) の人類学者で、数年前に阪大を訪れられたこともある方です。もともとは、アマゾンでフィールドワークを行い、アマゾン川流域の入植者たちの記憶、歴史、景観の密接な関係について、*In Amazonia* という本を書かれています。

本書、*Insectopedia* で、Hugh Raffles は、我々の身近で、我々に気づかれないまま暮らしている虫たちの世界に注目します。虫は、人間とは全く異なる知覚、身体、能力を持ち、それゆえ彼らにとっての世界の見え方／あり方は、我々人間にとってのものとは大きく異なっています。

百科事典の体裁をとって、「A」から「Z」までの短い章に分かれた本書では、虫と人間の関わりと、虫の驚くべき世界についてのエピソードが次々と紹介されます。最初の章「Air」では、航空機によって高高度の空中で虫を収集した 1926 年の科学調査のエピソードが紹介されます。ジェット気流が支配する高高度の大気の中には、意外なことに多数の虫が生息しています。これらの虫は、おそらく、上昇気流によってこの高度まで上昇し、しばしば信じられないような距離を移動していると考えられます。

虫についての常識を裏切るこのような驚きのエピソードを皮切りに、著者は、虫と人の関わりをめぐる多様な物語を紡いでいきます。Chernobyl と題された章では、奇形の虫を収集し描き続けるチューリッ

ヒ在住のイラストレーターが取り上げられます。奇形の虫は、チェルノブイリ原発事故の直後からヨーロッパ各地で多数発見され、大きな論争を引き起こしてきました。科学者たちは、正式に奇形と事故との間の因果関係を否定しましたが、一部の市民活動家たちは、奇形の虫を収集し続け、自然の変異とは異なる事故由来と考えられる変異のパターンがあると主張しています。チューリッヒのイラストレーターの数奇な人生をたどりながら、著者は環境汚染についての知識の不確実性と事故をめぐる政治が、一人の人生に与える複雑な影響を描き出します。

この他にも著者は、熱狂的な自然観察者でありながら反進化論者だったファーブルと進化論の間の奇妙な関係や、カブトムシをめぐる日本人の熱狂の歴史など、いずれも興味深いストーリーを追いつけます。それらから見えてくるのは、虫たちの奇妙な世界が、我々人間たちの目の前にあらわになっていく際に生じる社会的・文化的なドラマです。虫たちの世界は確かに奇妙ですが、その奇妙な世界の「発見」をめぐるドラマは、それに劣らず奇妙なものであるのです。

Hugh Raffles が本書で描き出すのは、根源的な他者である虫の世界と我々の世界は、互いに相容れないながらも極めて複雑に絡み合っているということです。*Insectopedia* は、虫を通した、人類学＝人間の科学のあり方を、その美しい英文とともに我々の前に描き出していきます。

著者は、多数の賞を受賞した大変な名文家ですので、ぜひその美しい英文共々この世界を味わってください。

推薦： 森田 敦郎（教授／社会学・人間学系）

リチャード・E・ニスベット（村本 由紀子 訳）
『木を見る西洋人 森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』

（ダイヤモンド社 2004 年）

著者であるリチャード・E・ニスベットは、西洋人（主にヨーロッパ、アメリカ、旧英連邦）と東アジア人（主に中国、韓国、日本）は、異なる世界観を持っていると考え、そのような人間の思考の違いはどのようにして生まれ、その違いが私たちの生活にどのように影響しているのかを本書で説明している。本書の冒頭でニスベットは、西洋と東洋の思考パターンの起源とされるアリストテレスや孔子の教え、また各国の歴史的・地理的条件が人々の思考パターンに与えたであろう影響についての紹介をし、現代社会における生活様式がそれらの思考パターンの相違をさらに強化している可能性を述べている。そして仮説を実証するために行った、西洋と東アジアの大学生を対象とした国際比較実験調査を紹介し、文化差と知覚・記憶・思考パターンについての見識を述べている。また本書の最後にニスベットは、西洋人と東洋人が（もしくは異なるグループに属する人々が）お互いの「違い」の根本を理解することが、グローバル化する世界で円滑なコミュニケーションを図るために必要なのではと提案している。

私は大阪大学に赴任するまで、アメリカの大学で子育てや家族関係の日米国際比較研究を行っていた。アメリカ生活では、様々

な側面で自分が日本人であることを考えなければならない場面に直面した。価値観や道德観に限らず、物事の考え方や視点が、アメリカ人の同僚と確実に違うことを感じずにはいられなかった。もちろん日本人にも様々な考え方をしている人がいるが、アメリカ人の同僚に感じた思いは、それとは違うものだった。そして、「違う」ということを「違う」として受け入れることが難しいということも学んだ。私たちは「違う」を感じた後に「優越」を付けてしまう傾向にある。比較研究をする際に、この「優越」のラベル付けは危険なアプローチに違いないと感じている時に巡りあった1冊が本書であった。この本から学んだ「違い」に「優越」を付けないようにする思考は、研究だけでなく、人間科学研究科国際交流室の副室長として留学生や留学を希望する学生のサポートを行うにあたり大変重要な要素だと信じている。

推薦： 安元 佐織（講師／国際交流室）

小林 朋道

『ヒトの脳にはクセがある—動物行動学的人間論』

(新潮社 2015 年)

生活の中で、自分自身を動物として認識することはあるだろうか。また、自分の認知や認識を通じて、ヒトの脳には特有の動作原理（本書でいうところの『クセ』）があると実感した経験はあるだろうか。現代では、ICT 技術や再生医療などの高度な科学テクノロジーが発展し、人間という存在そのものの在り方が以前とは異なりつつあるが、そもそも、自分自身、つまり、人間（そして、その脳の『クセ』）への理解は、現在においても、どの程度進んだのであろうか。本書は、動物行動学の視座から、ヒト・人の脳のさまざまな『クセ』を論考し、ヒトの脳の限界に触れながら、「ヒト・人を知る」という人間科学における大きな課題にもヒントを与えてくれるユニークな著作である。

その一節に著者の学生時代での登山での経験が述べられている。高い嶺から眼下に見下ろす大きな雲海に感極まり、落涙を抑えられなかったそうである。「なぜ、絶景に出会うと涙が出ることがあるのだろうか。」翻って、そもそも、「なぜ、絶景をみてみたい」と思うのだろうか。富士山山頂での初日の出を拝むために多くの人は雪深い山頂を目指す。ウユニ塩湖は世界の人々を引き付ける。雄クジャクの羽を人は見事な美としてみることができる。一方、

雌クジャクは、それを美として捉えているのだろうか。 $E=mc^2$ から自然界の美を感じる知性も、火に魅了される心も、ヒトの脳の『クセ』なのか。一方、進化の隣人である野生のニホンザルたちは、晴れ渡った秋空の夕日に目を奪われ、しみじみと感ずることがあるのだろうか。人と動物との違いは何か。ヒト・人の心や脳の働き・『クセ』には、まだまだ謎が多い。本書で論考されたさまざまな事例はその一部である。皆さんも探してみたいだろうか。ここでは、認知バイアスという言葉も挙げておこう。

本書のカバー裏面には「いくら科学が進歩しても、脳には限界がある…」と書かれている。時間の始まりや宇宙の果ては極めて理解し難い。スケールは小さいものの、自分自身や他者を十全に理解できているとも言い難い。そこにも自分の脳の限界を感じる。ただし、本書で考察された脳の謎・限界、そして『クセ』に類似する点は幾つも気にはなっていた。そのため、正直なところを言えば、推薦者が本書を書きたかった。先を越されたジェラシーを感じることも、ヒト（もしくは推薦者だけ）の脳の『クセ』の一つなのかもしれない。そんな『クセ』（や限界）に大きく翻弄されてしまうのか、それとも、楽しみながら上手く付き合い、成長のための伴走者としていくのか。大学での学びや生活の中で後者へのヒントや術（すべ）を学ぶためには、自分、そして自分の脳の『クセ』を見つめ直すことは一助となるかもしれない。

推薦： 八十島 安伸（教授／行動学系）

長谷川 寿一、長谷川 眞理子

『進化と人間行動』

(東京大学出版会 2000 年)

タブラ・ラサ（空白の石版）という言葉があります。生まれたばかりの人間は真っ新なノートのようなもので、各人が経験した出来事がそれぞれ書き加えられていくことで、一人一人個性を持った人間の心が形成されるという例えです。推薦本が扱うのは、これとは少し異なる視点です。それは「人間も生物の一種であって、人々の心には共通する特徴がある」というものです。生物である以上、人間も他の生物と同様に、進化の産物です。人間の骨や臓器のようなかたちのある物と同様に、人間の心や行動や社会といったかたちのない物も、進化という長い時間の過程で形作られてきました。生物に共通する進化と適応の原理を考慮することで、人間の理解を深めようとするのが、本書のねらいです。

進化は、多くの場合、誤解されています。私が講義をしてきた経験を振り返っても、その誤解は根深いように感じます。本書では、進化の仕組みをわかりやすく説明したあとに、進化論を構成する要素として一般的に考えられている「適者生存」「本能」「種の保存」「遺伝子決定論」という概念が時代遅れの誤りであることを指摘します。そして、多くの先行研究に基づいて、人間を含む動物の行動と社会が、進化の仕組みの中で作られてきたことを鮮やかに示します。例えば、血縁関係に基づいた家族の絆を大切

にすること、血縁関係にない個体同士が協力するにはある条件が必要になること、オスとメスで体の大きさや行動パターンに違いが生じることなどは、人間だけでなく人間以外の霊長類にも共通して見られる特徴です。

人間は進化の産物です。私たちの石版は完全な空白ではなく、生まれてきたときには既に進化の経緯が刻み込まれているようです。これは科学的事実です。しかし一方で、私たち人間の生活がこれらの事実にも必ずしも縛られる必要はありません。血のつながらない家族との絆を大切にすることや、生物学的な性にとらわれない自由な生き方は、私たち人間の生活をより豊かに、より幸せにしていくでしょう。そのような＜望ましい社会＞を築いていくためには、私たち人間が備えている特徴やクセを十分に理解した上で、適切な制度やシステムを構築していくが必要になるでしょう。

私は野生霊長類の行動と社会を研究しています。人間を含む霊長類の特徴を描き出すことによって、人間の本性（Human nature）を知りたいと思っています。興味のある方、一緒にサルの観察をしてみませんか？

推薦： 山田 一憲（講師／附属比較行動実験施設）

中川 義信・森 合音

『扉を開ければ見えてくる新しい病院のかたち』

(パレードボックス 2022 年)

大きな病院に入院や通院された方は、その殺風景さ、雑然としたたたずまい、時にはむき出しの配管などにげんりされた経験もあるかと思います。私は両親が入院する度に、なぜ病院の廊下はあれほどすぐに汚れるのかと不思議に思ったこともあります。毎日の診療活動で忙殺されていく痕跡が積み重なっているようにも感じますが、古いお寺の年季の入った廊下とは違って、患者の心を削ぐ風景ではないでしょうか。人の心と体はつながっていますから、病院の暗い風景が免疫力を低下させて、治療成果に影響するのは必至だと思います。

ここにご紹介する一冊の書物は、香川県善通寺市にある、四国子どもとおとなの医療センターという巨大病院の話です。著者は小児科医でこの病院の名誉院長である中川義信氏と、ホスピタルアーティストの森合音氏という異色の組み合わせです。ウェブで検索してもらえばすぐに分かりますが、この病院、外壁一面に絵が描かれています。夜になると各フロアは、青やオレンジ色といったフロアごとの色で照らされます。自分が今どのフロアにいるのか、表示を見なくてもわかるんですね。大学もこういうふうにしてもらえると無用に階段を上がったり下がったりしなくていいんですが……。それだけでなく、建物の中にも外にもいろいろな仕掛けがあります。

詳細は、病院のバーチャル見学をみてください。我が阪大病院もこの試みを一部で取り入れているようです。

さて、この著書は素敵な病院の紹介本ではありません。そうではなく、この病院がどのようにしてこんなになったのかという過程を記したものです。これも詳細はぜひ本を買って中味を読んでいただきたいのですが、綺麗な病院を作ればよいというわけではないんだということがよくわかります。優秀な専門家と資金とリーダーの決断があれば、もの凄く綺麗な病院はできると思います。しかし、たぶん、そういうようにしてできあがった病院の廊下はすぐに日常業務に忙殺されて次第に汚れ、機器が置かれ、せわしない空間に変貌するのではないのでしょうか。この本からは、持続する「新しい病院のかたち」が見えてきます。そして、たぶんそれは病院だけではなく、企業、役所、学校など、ほかの組織にもあてはまるものと思います。我が人間科学部のキャンパスもこうなって欲しいものです。

残念ながら一般の書店では扱っていませんが、アマゾンでは購入できますので、ぜひ一読してください。

推薦： 山中 浩司（教授／社会学・人間学系）

釘原 直樹 編集

『スケープゴートینگ』

—誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか？

(有斐閣 2014 年)

スケープゴート (scapegoat) という言葉がある。大辞泉によれば、古代ユダヤで年に一度人々の罪を一身に負って荒野に放たれたヤギが原義となっており、そこから転じて「身代わり」や「いけにえ」といった意味で用いられている。

テレビニュースで事故や事件が報道されるたびに、私たちが考えがちなのが、「その責任は一体どこの誰にあるのか？」という問題である。むろん、原因がはっきりしていればよい。しかし、中には、不文律の習慣や風土のせいであったり、被害者にも落ち度があったり、複雑な因果関係が絡んでいたりなど、特定の誰かが全面的に悪いというわけでもないケースもある。

本書の目的は、このように責任主体が不明確な状況下において、誰かをやり玉にあげるという“理不尽”社会的現象が起こりうるということを啓蒙しつつ、その心理を理論的に説明することにある。本書で紹介されている事例の中には JR 福知山線の脱線事故や感染症に関する報道など記憶に新しいものがある。その分析を読み進めていくうちに、「誰かをやり玉にしてこのストレスや不条理さを解消したい」という恐ろしい力学が社会に広く蔓延していることを読者はきっと実感することだろう。なお、紹介者自

身も、企業の不法投棄を題材に研究を行ったことがある（綿村他，2013）。その事件でも特に誰が悪いわけではなかったのだが、実験参加者の多くは、社長や管理職だけでなく行政にまで賠償責任や倫理的責任を追及しようとした。責任がゼロとは言い切れないものの、なぜ血眼になって非難の矛先を探そうとするのか、非常に興味深く、また恐ろしくも感じた覚えがある。

事故や事件があったとき、「仕方がなかった。誰にも責任はない。」と片付けてしまうことは、被害を受けた当事者はもちろん、社会にとっても気持ち的には受け入れにくいことであろう。しかし、だからといって安易にその矛先をスケープゴートに向けてしまってもよいのであろうか？情報化や科学技術が進み、ヒトと社会との関わり方が超複雑化した現代社会にあって、私たちはスケープゴートという単純なセオリーによって翻弄されている。この実態を本書から学んでもらえれば幸いである。

推薦： 綿村 英一郎（准教授／行動学系）

「私の一冊」
—人間科学研究科教員が薦める本—

「自著を語る」
—人間科学研究科教員が著した本—

—シリーズ人間科学—

—未来共創センター活動紹介—

「自著を語る」

—人間科学研究科教員が著した本—

渥美 公秀（教授／共生学系）

『災害ボランティア新しい社会への
グループ・ダイナミックス』
（弘文堂 2014 年）

本書は、1995 年に西宮市で阪神・淡路大震災に遭遇して以来、災害ボランティア活動の現場で考え続けてきたことをまとめたものです。執筆のきっかけは、2011 年の東日本大震災でした。災害ボランティアは、阪神・淡路大震災以降、日本社会に定着してきたはずだったのですが、東日本大震災では、災害ボランティアの初動が遅れました。災害ボランティア活動に参加しようとする声を遮るように醸し出された自粛ムードが原因でした。東北の被災地では、多くの人々が苦しみ、深い悲しみの中で救援を求めているにもかかわらず・・・

阪神・淡路大震災の時、災害ボランティアは、既存の社会の仕組みを打ち破り、改善していく希望を見せてくれました。しかし、今は、災害ボランティアがどんどん既存の社会に取り込まれているように思います。

何かがおかしい。なぜ、こんなことが起こってしまったのでしょうか？その原因を突きとめ、災害ボランティアを巡る諸問題を解消し、災害ボランティアが、被災者の傍にいて、被災者に寄り添う姿を取り戻したい。そして、その先に、災害ボランティアが拓く新しい社会を構想し、そこに向かって確かな一歩を進めたい。本書には、そんな切実な想いが込められています。

第1章では、東日本大震災に際し、私自身がどのように実践と研究を進めてきたかということ、赤裸々に綴りました。第2章では、災害ボランティア研究の理論的な枠組みを紹介し、第3章で、阪神・淡路大震災以来の災害ボランティアの動向について改めて整理しました。第4章から第6章は、災害救援、復興支援、地域防災といった場面を対象に、災害ボランティアを巡る話題を考察し、最終章では、災害ボランティアが拓く新しい社会について、構想し、そこへと至る道筋を提示しています。

本書は、災害ボランティア活動について考えたいと思っている人、災害ボランティア活動に行くかどうか考えている人、災害ボランティア活動に参加した経験を振り返っている人に読んで頂ければと思います。また同時に、災害ボランティア活動には参加したくない人、災害ボランティア活動に疑念を持っている人などにも、是非、手にとってもらえればと願っています。

監修 日本湿地学会

編集代表 高田雅之・朝岡幸彦

編集 石山雄貴、太田貴大（准教授・共生学系）、
佐々木美貴、田開寛太郎

『水辺を活かす 一人のための湿地の活用—

（シリーズ水辺に暮らす SDGs 第2巻）』

（朝倉書店、2023 年）

本書の表記である「水辺」は、「湿地」とほぼ同義として用いられている。湿地に該当する場所は非常に幅広い。一般的にイメージされがちな湖沼や湿原だけでなく、沿岸域にある干潟やサンゴ礁、氾濫原を含む河川、農業と密接に関係している水田やため池といったものも湿地に含まれる。

しかし、残念ながら、身近にある淡水の湿地には、ぐちゃぐちゃで人間が入れない場所とか、不快な昆虫をうみだす場所といった負のイメージが付与されており、人間との良好な関係が築かれていないことが多い。また、身近な湿地の多くは、土地が平らで埋め立てにより活用しやすいため、経済発展に伴い失われてきた。

本書を含む「シリーズ水辺に暮らす SDGs」全3巻では、このような正負ともに多様な側面を持つ湿地という対象を学際的な視点から扱っており、SDGsの根底にある自然環境と人間との持続的な関係性の構築に資することを目指している。専門家だけでなく、多くの人に湿地について知ってもらい、湿地の保全管理や持続的な利用に結び付くよう、本書の構成自体も、基礎となる解説に加えて実践的な方法や事例を豊富に取り上げている。

編集者は、日本湿地学会の若手研究者を中心としており、国内での湿地研究に関する最先端の知見が集積されている。湿地の保全と持続的な利用を目指すラムサール条約からの要請や、日本国内の湿地の保管理に関する自然科学、社会・人文科学の歴史を踏まえて、編集されている。

特に本書のシリーズ第2巻は、湿地と人間の様々な関係性に注目し、経済、文化、健康福祉、普及啓発や教育の視点で構成されている。経済の視点では、第2章で、観光やまちづくりといった地域経済の振興に湿地を巧く活かす方策について述べられている。これらに関する国内最先端の豊富な事例が、実践者の筆により紹介されているのも読みどころである。また、第3章では、CSR や CSV といった大手民間企業の環境配慮行動の今後の方向性について分析がなされている。気候変動対策や生物多様性保全といった環境配慮が民間企業にも強く求められるようになっており、現状の多様な活動を整理・理解するうえでの助けになるものといえる。第5章の教育の視点では、CEPA を切り口に、国内の教育実践やボトムアップの活動事例が豊富に紹介されている。特に、ラムサール条約に関連する活動のネットワーク化は多くの人々をつなぐ極めて有効な方法として描かれている。

湿地というなじみの薄い生態系を多様な面から知り、自然環境の保全や持続的な利用を考えるうえで、有用な書籍であるので、ぜひ一読してほしい。

大谷 順子（教授・共生学系） 編

『四川大地震から学ぶ

—復興のなかのコミュニティと「中国式レジリエンス」の構築—』

（九州大学出版会 2021 年）

国の威信をかけた北京オリンピック開催の直前、中国の様々な社会問題などが世界中の注目を集めていた 2008 年 5 月 12 日に四川大地震は発生した。地震をきっかけに中国社会でもボランティア元年、NGO 元年と呼ばれる市民の動きが沸き上がり、中国政府は微妙な駆け引きを行いながら復興のかじを取ることを余儀なくされた。

本書は、四川大地震発生から 13 年経過した今、復興政策、被災者のこころのケア、被災地観光、少数民族、防災教育といった多様な視点から変容する中国社会を中長期的視点で見つめ、中国式レジリエンスの構築について考察しながら、そこからわが国が汲むべき教訓を考えるものである。

若手中国人研究者（大阪大学大学院人間科学研究科の大学院生）らが、その言語能力と現地でのネットワーク・フットワークを活かして行った調査の成果を、研究会を重ねて検討し、日本語を用いて執筆した。災害・防災は日本と中国の間で国際協力が期待されている重要な分野であり、また災害が頻発するアジア太平洋地

域においても重要な課題である。

もともと、1冊の本として企画し、構成の各章をかける人を探して書いてもらったというより、研究室に集まってきた院生たちのそれぞれの研究テーマがあり、それを1冊の本にまとめようとした苦労がある。各章では院生が国内外の学会で発表をして受賞した研究も含まれている。また中国の現状により、課題を指摘することが当局批判として捉えられると中国人の若手研究者にとって難しいことにならないかという心配、配慮が编者としては必要であった。中国当局の言論統制を間接的に受けることにならないようにというバランスを意識した。

長年にわたり繰り返し訪問した現地で撮影した膨大な写真を整理しながら限られた掲載枚数のために選定するとき、その時々を思い出しながら絞り込みに悩んだ。カバーの写真が表裏ともに色合いが暗く雰囲気の高いものであったので、巻頭のカラー口絵では最初に明るく色合いも鮮やかな写真を使い、その後時間を遡っていくような並べかたとした。

読み物として、四川や日本の大学・研究所で活躍する中国人研究者、国際協力機構（JICA）の四川支援に従事した日本人などによるコラムも掲載している。

『国際開発研究』第30巻第2号（2021年191–194頁、島田剛）など学会誌書評に取り上げられているので併せてご覧ください。

大谷 順子（教授／共生学系）

『子育ても、キャリア育ても

—ウィズ／ポストコロナ時代の家族のかたち—』

（九州大学出版会 2023 年）

超少子高齢化が進む時代、本書は、国際開発キャリアの背景を持つ研究者らを中心とした大学教員たちから、若い世代にむけた、どのように人生を切り開くかについてのメッセージ集である。

超少子高齢化がすすむ日本では、2017 年と 2018 年の妊産婦の死因の第一位が自殺となった。子育てに孤立を感じる母親の割合が 7 割に上ると報告されている。その日本では、少子化に歯止めをかけるために産めよ育てよ、と言われ、経済停滞を打破するために女性の輝く社会、女性も働きましょう、と言われ、現代日本の女性は多くを期待されている。出産育児とキャリアは両立できることなのか、両立するためにはどのような準備が必要なのか。また、どのような社会になっていかないといけないのか。子育ては、個人の負うべきものなのか。女性も男性も、また、いろいろな年齢層の社会構成員がおのおのの生を両立していくには、どのような社会になっていかないといけないのか。

本書は、2018 年度より大阪大学で開講している「共生学の話題—超少子高齢化の孤育て」の講義ノートをもとにしている。国際保健学・母子保健学、国際開発教育の背景を持つ研究者らが、それらの課題を身近な例からとりあげ、若い世代を担う学生たち

が、これからキャリアと次世代育成の両方をどのように考えて人生設計に取り組んでいくかを考える機会を提供している。海外留学、就業と子育てとの両立を苦戦してきた女性・男性研究者やプロフェッショナルを講義のゲストスピーカーまた本書の分担章執筆者として迎えている。小川寿美子名桜大学健康科学部教授（大阪大学人間科学博士）、北村友人東京大学大学院教育研究科教授、城戸瑞穂佐賀大学医学部教授、Lynne Y. Nakano 香港中文大学日本研究学部長・教授、鄭雅文国立台湾大学公共衛生学部長・教授（城戸、Nakano、鄭は大阪大学招へい教授）による分担章や、馬場幸子地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪母子医療センター母子保健調査室室長・大阪大学医学研究科招へい准教授によるコラムを含む。

開講してみると、履修生は女子ばかりになるという予想に反して、半分は男子学生である。頼もしいことであり、毎年、履修学生たちからも学ばせていただいた。自分のキャリアだけでなく、パートナーのキャリアも大切にしながら、ワーク・ライフ・バランスを考える機会となっている。持続可能な開発目標（SDGs）取り組みの一例として、「誰一人取り残さない」社会の実現を考える次世代の育成の機会ともなっている。子育てだけでなく、UNESCO の包括的性教育や、若年妊娠と貧困、外国籍の子や医療ケア児など無園児の問題を取り上げている。将来、持つであろう（実際に将来子どもをもつ現在の学生は人口統計学で見れば半分にも満たないかもしれない）小さな命と家族のことも考える機会となっている。

岡田 千あき（教授／教育学系）

『サッカーボールひとつで社会を変える』

（大阪大学出版会 2014 年）

スポーツ、国際協力、社会貢献などに興味や関心のある皆さんに読んでいただきたい本です。従来、スポーツと言え、記録を伸ばすこと、広くスポーツを普及すること、スポーツを取り巻く様々な課題を解決することなど、スポーツとスポーツにまつわる世界を取り上げたものがほとんどでした。研究の側面から見ると、競技スポーツの発展のみならず、生涯スポーツ・地域スポーツの振興、学校教育における体育や部活動の問題など、日本国内のスポーツに関わる課題の解決を模索したり、政策策定に寄与することの優先順位が高かったとも言えます。

しかし、近年、スポーツが一人一人の生活に、社会に、地域に、国にどのような正負の影響を与え、貢献しうるかという社会開発の文脈における「スポーツ」にも注目が集まっています。

本書では、世界で最も多くの人に愛好されているサッカーを取り上げています。①ゆるやかな人間関係を作る（ホームレスワールドカップ）、②社会の変化に対応する（カンボジアの社会開発）、③社会課題の解決に取り組む（ジンバブエの HIV/AIDS 啓発）、④国の未来をイメージする（マレーシアと J リーグの取り組み）と様々な単位におけるサッカーを用いた活動の事例を詳しく紹介しています。

国際協力、社会貢献というと「ハードルが高いもの」あるいは「重要だと思うけれども自分には遠い世界の話」と考える学生が多いと

聞きます。スポーツに限りませんが、自分が好きなこと、自分にとって身近なことを追求する、あるいは楽しんで関わることで社会に貢献できるのであればやってみたいと思う方も多いのではないのでしょうか。本書の事例はサッカーですが、「身の丈に合った」「持続可能な」「寄り添い続ける」国際協力や社会貢献への関わりを考えるきっかけになればと思います。また、スポーツが好き、大人になっても何らかの形でスポーツに関わりたいと考える皆さんにも、多様な関わり方を考えていただければと思います。

川端 亮（教授／社会学・人間学系）

稲場 圭信（教授／共生学系）

『アメリカ創価学会における異体同心―二段階の現地化』
（新曜社 2018 年）

創価学会は日本で最大の新宗教教団であり、政権の一翼を担う公明党の支持団体でもある。その影響は宗教だけでなく、政治や経済などの社会のさまざまな面にまで及んでいる。

グローバル化の事例としても創価学会は興味深い。グローバル化し、世界で製造、販売している代表的企業であるトヨタの海外販売拠点網は 172 カ国という。創価学会 Soka Gakkai International (SGI) の広がりはその上で、世界の 192 カ国・地域に信者を擁している。

南無妙法蓮華経を唱える、極めて日本色の強い創価学会が、なぜグローバル化できたのだろうか。

本書は、アメリカの SGI を対象とする。ロサンゼルス、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、マイアミ、ハワイを計 15 回訪問、多様な人種、職種、社会階層のメンバー 70 人ほどにインタビューをし、英語の機関紙誌を調べ、現地での SGI メンバーの集まりに参加したデータを元に取り上げたものである。

序論で SGI-USA の歴史を紹介したあと、1 章で日本ではあまりなじみのないアフリカ系アメリカ人とゲイの人々の信仰についてインタビューを元に描き、日本の創価学会の教えがアメリカでどのように新たな意味をまもって広がっているのかを示している。2 章で

は、入信と回心過程という宗教社会学の研究テーマについて、アメリカの社会的背景も入れて分析している。3章は、組織の編成の観点から、SGI がアメリカ社会に根付く要因を分析し、4章では、教典やことばの英語化・現地化は、2段階のステップを踏むことを明らかにした。また、5章では、創価学会においては極めて重要な概念ではあるが、アメリカの文化を考えると受容されるのが非常に困難であると思われる「師弟」の概念が、なぜ浸透しているのか、その理由を探究した。

人間科学の研究においては、多くの研究分野で質的なデータ分析が用いられている。本書は、インタビューデータを分析し、平易な文章で記述しながらも、その記述方法において、細部に技巧が施されている。また、データ分析に基づいて、学術的な概念が導き出されたり、既存の学術的な概念との比較が行われることによって、研究書としてのおもしろさある。

そして、異なるアメリカ文化と出会った日本型の組織がどのように変容するのかを分析することを通じて、UK が EU を離脱し、アメリカファーストの時代に、多文化共生はいかに可能であるのか、を考える材料となるだろう。

河森 正人（教授／共生学系）

『タイの医療福祉制度改革』

（御茶の水書房 2009 年）

Amazon で本書はエリアスタディ（地域研究）に分類されている。地域研究といえばその国の言語を駆使し、固有の歴史とか文化に精通した人たちがする研究であるというイメージがあるだろう。他方で思うに、地域研究とはたえずディシプリン（各学問領域における方法や理論といわれるようなもの）と対峙するものなのではないだろうか。すなわち、ディシプリンという（一見？）確固としたものにたいして問題を投げかけ、修正をせまっていく、そういう機能を地域研究はもっているのではないかと思う。

ディシプリンは、基本的に西洋の歴史や風土のもとで発展して洗練されてきたものが多い。それにたいして、アジアをふくめ、西洋以外の国ぐにから問題提起をしていくことが必要なのではないだろうか。具体的にいうと、2003 年から 2004 年にかけて、東アジアの社会保障論にかんする本が 5～6 冊出たが、これらの本は近代雇用部門の被雇用者を対象とした、国家による社会保障に言及している。つまり、都市化と産業化を前提とした議論がメインになっているのである。これにたいし、農民の近代雇用部門への吸収が依然として低位な中国やタイのそれを考えるうえで、上記の既存研究はかならずしも適当な準拠枠ではないということを本書で主張した。国家がメインとなって近代雇用部門に社会保障サービスを供給するという考え方であるが、そもそも、この考え方は 1970～80 年代の

ヨーロッパにおいて主流であった。本書によって、2010年に第31回発展途上国研究奨励賞を受賞することができたが、こうしたところを評価してもらえたのだと思っている。

今後、どの国でも財政負担を抑えたケアの仕組みをどのようにつくっていくかが重要になってくる。具体的にいうと、国の財政が厳しいなか、コミュニティのレベルでそれぞれ工夫しながら（つまり国家ではないということ）、手づくりのケアシステムをつくっていく必要がある。この点について、医療や福祉の制度をつくるばあいにはヨーロッパをはじめとする先進国の制度をモデルにしがちで、タイのばあいもイギリスやベルギーの制度を相当制度移植しようとした。しかし、医療保障の分野ではある程度こうしたことが可能であるが、コミュニティのレベルでとくに介護の仕組みをつくるようなばあい、手本はヨーロッパにない。資源の賦存状況が異なるからである。そのなかで、地域研究が一定の役割をはたすことができると思われる。

先日、タイにある青年海外協力隊のドミトリーに本書が置いてあり、みんなが読んでいると聞いた。うれしいことである。

クロイドン シルビア（准教授／社会学・人間学系）

『The Politics of Police Detention in Japan:
Consensus of Convenience』
(Oxford University Press 2016年)

In the midst of growing scrutiny of Japan's criminal justice system due to the arrest and detention of Nissan executive Carlos Ghosn, *The Politics of Police Detention in Japan* is a timely book to read. It illuminates the source of legal legitimacy for the Japanese practice of prolonged police detention of criminal suspects, which is unique amongst developed countries in that it lasts for 26 days on average (compared to 3-4 days in most other such places). The reader is introduced to a little-known clause from the law regulating for prisons that authorizes substitution of detention center cells for police cells for the purpose of detention. It is by recourse to this clause that the investigative authorities in Japan are achieving detention of suspects in their own cells, right up until indictment, in 98% of cases.

As the volume explains, however, the substitution of facilities was never meant to be the norm, as it is today. At the point at which the clause entered the law in 1908, it was merely a stop-gap measure that was aimed at alleviating a shortage of Justice Ministry infrastructure – the place for suspect detention of original intent – and was meant to be used on an exceptional and temporary basis. The reason why the clause became utilized to such an extent is mainly because after the Occupation the police and prosecution found themselves lacking other investigative tools.

McArthur's legal aides had reduced their stature, the Police Preservation Law were repealed, and a new Code of Criminal Procedure was introduced with the principle of *habeas corpus* (i.e. that any arrestee should be brought promptly, within 72 hours, before a court of law to decide whether their continuous detention is lawful). The prolonged detention in police cells was the only way in which the police and prosecution could continue to examine suspects as before.

The Politics of Police Detention in Japan relates how, whilst the investigators are eager to capitalize on the facilities-substitution clause, all other major stakeholders too – the Justice Ministry, the legislature, the courts, and lawyers – have each come to view this alternative detention arrangement as more suitable and convenient. The investigators' actions are just one part of a broader self-reinforcing mechanism, which is indeed why the system persists in spite of long-standing international criticism.

Apart from teaching students about a specific aspect of Japan's criminal justice system, the book should prompt them to consider human rights debates.

近藤 和敬（准教授／共生学系）

『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する
——〈内在〉の哲学試論』

（講談社 2020 年）

本書は、フランスの哲学者であるジル・ドゥルーズと社会活動家であるフェリックス・ガタリの最後の共著（実際にはほとんどドゥルーズによって書かれているので、半ばドゥルーズの最後の単著でもあるのだが）である『哲学とは何か』（1991 年刊）について、とくにそれを一貫した仕方で読めるようになるということを目標にしたものである。全体で三部構成になっており、第一部ではドゥルーズとドゥルーズ＋ガタリの著作の年代順の分析を通して、『哲学とは何か』で主題化される「内在」という言葉が、どのように形成され、何を問題にしているのかということを明らかにしようとしている。続く第二部では、第一部で明らかにされた「内在」という語を理解可能にする思考の全体像を著者の解釈をもとに再構築している。第三部では、これらの準備を踏まえて実際に『哲学とは何か』のテキストを文字通り読むことを試みている。実際には、第二部の終わりまで読めれば、第三部は比較的簡単に読めるように作っているのので、頑張って第二部の終わりまでいけたら、『哲学とは何か』も少なくともここで提示されている読み方では読めるようになっているはずである。

この本自体はあまり初学者向けではなく、とくに学部的一年生が読むべきかと言われると正直少し迷うところがある。ただ、本書冒頭の「序文」だけは、おそらく読むことができるし、アマゾンなどの Kindle 版を扱っているところでは、「序文」全体の試し読みができるので、そのために薦めている。「序文」で出てくるエピソードは、実際に、わたしが人間科学部の学部生だった時のものであり、その点でも皆さんには馴染みやすいかもしれない。冒頭に出てくる（指差しなしの）「これがある」の話に気が付いたのは、人間科学部の横のテニスコート側の駐車場を歩いているときだったことを今でも覚えている。

坂口 真康（准教授／共生学系）

『「共生社会」と教育—南アフリカ共和国の
学校における取り組みが示す可能性—』
（春風社 2021 年）

昨今、グローバル化の進行などにより人びとの文化的背景が一層多様化する中で、社会で他者といかに「共生」できるのかが盛んに議論されるようになりました。そのような中、本書では、1994年に初の民主的選挙が行われ、制度としてのアパルトヘイト（人種隔離政策）が撤廃された後の南アフリカ共和国（南ア）の学校教育を事例として、「共生社会」と「共生教育」の理論を考察することを目的としました。その背後には、いわゆる欧米の多文化社会を想定した中で築かれてきた従来の「共生」に関わる理論に対して、異なる観点からの考察を行うというねらいがありました。

本書では、文献研究、政策・制度の分析、学校教科書・試験内容の分析に加えて、南ア西ケープ州の公立高等学校3校におけるフィールドワーク（2012年～2014年に、学習者63名と教育者21名へのインタビュー調査、学習者への質問紙調査（2013年のみ実施。有効回答者数1,520名）と96回の授業観察を実施）を研究方法として採用しました。研究成果をまとめる際には、2000年代前半のナショナル・カリキュラム改革により南アの高等学校段階で導入された、“Life Orientation”という名の同国の「共生教

育」の中核を担う必修教科を軸にした分析・考察を行いました。

本書では、現代の南アの高等学校の「共生教育」では、自他の思考の相違とそれにより生じ得るコンフリクトを前提とした教育が展開されている側面があることなどを提示しました。また、暴力等の「人種差別」が行動として表出される状況から身を遠ざける際には、「トラブル」を避ける、「命の危険」から身を守る、といった動機が働いている側面があることを示唆しました。さらに、その点において、現代の南アの「共生」は、「共に生き延びる」ための営みという側面を有していることを指摘しました。加えて、アパルトヘイトの被害者も加害者も含みつつ「共生」する選択肢をとった現代の南アの取り組みからは、人間の「失敗」を「赦す」という観点を学びとることができることを示しました。

本書には、調査実施の困難さなどから、日本（語）の文脈では研究がほとんどされてこなかった南アの学校教育について、「共生」に関わる理論に基づきつつ、実証的に探究した点に独自性と意義があります。既存の議論とは異なる角度から「共生社会」やそれに関わる教育（特に学校教育）を思考し、試行してみたい方々に、ぜひとも本書を読んでいただければと思います。

なお、本書が出版されるまでの著者の経験などについては、『わたしの学術書——博士論文書籍化をめぐって』（春風社編集部編、春風社、2022年）の中の「学際的な研究への架け橋」（pp. 463-469）に詳しく書かれております。そちらもぜひご一読ください。

佐々木 淳（教授・教育学系）

『ころのやまいのとらえかた』

（ちとせプレス 2024 年）

「太郎さんは徒歩（時速 3 k m）で家を出発しました。
弟の二郎さんは自転車（時速 2 0 k m）で後を追いました。
家から 2 k m のところで二郎さんは追いつきました。」

この文章を読んであなたはふと何を考えたでしょうか？
大阪大学に入学された皆さんは、「なんでこんな計算問題が書いてあるのか？」と思ったり、算数が得意な人だったら「二郎さんは太郎さんの何分後に家を出たのか？」と自然に計算していたかもしれません。しかし、計算問題であるとは書いてはありません。

この本のテーマである「ころのやまい」もおなじような側面を持っています。

「気分が落ち込んでしまうんです。なんだかつらいんです。」

こんなフレーズが聞こえてきたとき、「これは何かの症状なのかな」とか、「気分が落ち込むならうつ病かな」という風に「症状」とか「病気」というとらえかたをすることは非常に自然です。しかし、症状や病気はインパクトがあるものなので、それ以外の部

分が見えづらくなります。太郎さん二郎さんの例でいうなら、計算問題ではない側面において、「太郎さんはなぜ自転車じゃなくて歩いて出ていってしまったんだろう？」「お兄ちゃんは何で弟を待たなかったんだろう？」、あるいは「わりと急いで追いかけているのはなぜだろう？」という素朴な問いが生まれてもよいはずです。そして、こうした問いは2人について計算よりも多くのことを教えてくれるはずです。

この本は、「症状」とみられがちな心理的現象を様々な視点から眺めていきます。先ほどのうつ病に見える方が登場して、様々な視点から考察されてゆきます。この本の使い方は出版社のサイトや前書きで読めますのでご覧ください。そして、皆さんもよろしければ、ご自分が「こころのやまい」のように思っていることを頭に浮かべながら読んでみてください。

園山大祐（教授／教育学系）監修・監訳、田川千尋監訳
京免徹雄・小畑理香 編

『教師の社会学

—フランスにみる教職の現在とジェンダー—

（勁草書房 2022 年）

近年、教師の労働環境の過酷さや教師不足といった教師を取り巻く課題がメディアなどで取り沙汰される機会が増えている。本書は、こうした日本が抱える課題を考え直すための1つの手がかりとして、フランスにおける教師教育についての日仏の研究者による論考をまとめたものである。

本書は3部構成で、第Ⅰ部「教職の変遷と現在」では、年齢や性別、学歴、出身社会階層といった点から初等・中等教師集団を構成する人びとを分析し、その職業アイデンティティや社会的地位についての自己評価、専門職性の変容を明らかにしている。また、親としての教師の教育戦略にも光を当て、教師ならではの教育制度についての専門知識や労働時間の柔軟さを、自らの子どもの家庭教育に活かしている実態を分析している。

第Ⅱ部「教師とジェンダー」では、女性教師の増加にもかかわらず、上位の学校段階や管理職では男性優位が維持されていることが示される。加えて、教師自身がもつジェンダー・バイアスについても検討し、それが教室での実践に及ぼす影響やステレオタイプの思考を回避するために教師養成段階で何が求められるかと

いった問題にアプローチしている。管理職の女性比率などは日本の方が低い、これらは日本にも通じる問題である。

第Ⅲ部「教師の労働環境」では、授業準備や答案採点などを通じて労働が日常生活に入りこむ教師の働き方、保護者からのプレッシャーや任務の多重化・多様化による教師の精神的消耗、労働条件の悪化による離職率の上昇といった、教師の労働をめぐる問題が取り上げられる。フランスの教師の勤務時間は日本よりも大幅に少なく、柔軟な働き方が可能であるほか、日本でも教師の働き方改革として導入が進む専門スタッフとの協働もすでに行われている。それにもかかわらず、日本と類似の深刻な問題が見られることが明らかにされているのである。その一方で、フランスでは他の職業から初等教師への転職が増加しており、全体の約3分の1を占めるという興味深い実態についても分析されている。

本書に収録された論文の多くはフランス人研究者によるものであり、フランスの教育制度や教師教育についての前提知識がないと難しく感じられるかもしれない。とはいえ、これまで述べてきたように、本書で扱われている問題自体は日本にも共通する部分が多く、馴染みのあるものである。また、インタビューも多数引用されており、フランスの教師のリアルなあり様の一端を知ることでもある。同様の課題に向き合うフランスの事例を知ること、日本が置かれている状況を相対化する視点とあらためて問い直すヒントが得られるだろう。

園山 大祐（教授／教育学系） 編

『岐路に立つ移民教育』

（ナカニシヤ出版 2016 年）

本書は、外国人児童生徒の受入れおよび移民の教育保障と学力について日本とヨーロッパを比較検証するものである。

1970 年代より単純労働者の受入れ停止を機に西ヨーロッパにおける外国人児童生徒の教育機会保障が開始されてから 40 年が経つ。ヨーロッパの課題を再確認し、日本における 1990 年の入国管理法の改正以降増加傾向にある外国人児童生徒の教育課題に、どのように還元できるか、まとめたものである。日本の外国人教育問題に関心がある人に推薦したい。

ヨーロッパ諸国として、フランス、ドイツ、イギリス、オランダ、スウェーデン、スペイン、ロシアを取り上げている。古くから移民の受入れ大国として経験値のあるフランス、ドイツ、イギリスにくわえ、多文化社会のモデルとされたオランダ、スウェーデン、そして新たに移民の受入れ国となったスペイン、ロシアを加え、日本との横断比較研究となっている。

第 1 部で、新規外国人教育の対応に迫られた日本との比較で、ヨーロッパにおける学習権の保障、教育機会の確保についてまとめている。第 2 部は、ヨーロッパにおける移民第二世代以降の学力問題について分析し、国際機関である OECD のマクロな分析や提言に注目している。日本の今後の外国人の定住化を見据えた学力保障にむけた補償教育の機会確保など検討課題は多い。第 3 部では、外国人・移民教育に必要

とされる出身言語・文化の教育、あるいはマイノリティを包摂する教員養成のあり方、さらにはイスラーム学校のようなエスニック（宗教）学校の状況について検討した。

またコラムを通じて、現場の声や、映画情報など学生に関心を持たせる工夫も凝らしてみた。あるいは付録に基本情報をいれ、出版社のサイトには学校系統図など、教科書としても使いやすくなるよう配慮してみた。

本書を通じて、ヨーロッパの移民問題の多様性に関する理解の促進と同時に、日本の外国人生活者に対する関心の広がりにつながれば嬉しい。そして、政策立案者や学校関係者、保護者（PTA）などに、海外の実践や研究成果をヒントに、日本の教育制度の改善に役立てればと考える。

入戸野 宏 (教授／行動学系)

『「かわいい」のちから：実験で探るその心理』

(化学同人 2019 年)

日々の会話はもとより、メディアでもたびたび登場する「かわいい」という言葉。何となく楽しい感じがしますが、改めてその意味を尋ねられると答えに詰まってしまいます。「かわいい」が若者のサブカルチャーとして注目されるようになったのは今から 50 年ほど前であり、サンリオのハローキティが誕生したのは 1974 年のことです。

小動物や赤ちゃんをかわいいと言うのは理解できます。でも、最近では、「きもかわいい」(キモい+かわいい)とか、「ぶさかわいい」(不細工+かわいい)といった言葉もふつうに使われています。

「かわいい」とはいったい何であり、なぜ人々を魅了するのでしょうか。かわいいことは何かの役に立つのでしょうか。

本書は、このような「かわいい」に関するさまざまな謎を、実験心理学の視点から明らかにしたものです。「かわいい」は、これまで文化論や美学の立場から語られてきましたが、データに基づいて科学的に研究したのはこの本が初めてです。実験心理学とは、人間の心や行動に関する法則を実証的に明らかにする科学です。そこで得られた知見を整理し、論理的に組み合わせることで、「かわいい」の謎を解き明かすことができます。

かわいいと感ずることの性差や年齢差に始まり、かわいいと感ずられる形状、「かわいい」と「cute」の違い、幼さとかawaiiさの関係、

「かわいい」を感情として捉える視点、「かわいい」がもたらす効果、「かわいい」の産業応用に至るまで、幅広いテーマを扱いました。巻末には、これまで国内外で発表された「かわいい」に関する研究文献のリストをつけました。著者のウェブサイト (<http://cplnet.jp/kawaii>) にもリンクつきで載せていますので、ご覧ください。

かわいいものが好きな人だけでなく、科学的な心理学でどのような研究が行われているかに興味がある人にもおすすめの一冊です。タイトルに表現したように、「かわいい」にはこれからの時代に必要な力が宿っています。一言でいえば、それは「やさしさ」です。自分で工夫してデータを取ることで新しい世界が見えてくるという実験心理学の魅力を、「かわいい」というやわらかな題材を通して、多くの人に知ってほしいと思います。

入戸野 宏（教授／行動学系）

『見るだけで心が整う かわいい動物の写真』

（アスコム 2023 年）

研究者の仕事はたくさんあります。私のような実験系の研究者にとっては、実験を行い、結果をまとめて、英語で論文を書く。これがメインの仕事です。これまで蓄積されてきた人類の知識体系に少しでも寄与することが研究者の望みだからです。それに加えて、ときおり一般向けの講演を頼まれたり、テレビや雑誌の取材を受けたりすることもあります。

人間科学や心理学の研究対象は私たち自身ですから、その研究成果は多くの人たちに関係するはずですが、しかし、情報を提供する側と受け取る側の間には大きな壁があります。専門家は科学的な過程や厳密性を重視しますが、一般人は往々にして分かりやすい結論だけを求めます。慎重に発言した内容であっても、都合よく切り取られて使われたり、誤解されたりすることもあるので、マスコミによる紹介を快く思わない研究者もいます。

私が「かわいい」についての研究をはじめてから 15 年が経ちます。そのような一風変わった研究を始めたきっかけについては、前著『「かわいい」のちから』（化学同人、2019 年）に書きました。ときおりメディアで取り上げていただくこともありましたが、科学的に不確実なことは言うまいと決めていました。しかし、最近

になって、それは研究者の逃げ道にすぎないのではないかと考えるようになりました。パソコンやスマホといったハイテク機器は、なぜ動くのかを理解しない人々にも利便性をもたらします。人間科学についての知見も、もしそれが科学的にしっかり検証されているならば、結論だけでも益をもたらすはずです。その検証を行うのが専門家の仕事です。限界を理解した上で、現時点における結論をできるだけ明示する努力が必要なのかもしれません。

動物の写真集はこれまでもたくさんあるが、「かわいい」の効用をしっかり述べた本を作りたいという出版社の希望に応じて、この本は生まれました。自分からは決して書こうと思わない種類の本です。一般の人に分かりやすい表現と学術的に厳密な表現との間で葛藤しながら、また、直接の科学的根拠（エビデンス）がないものは状況証拠に頼りながら、「ここまでは言ってもいいだろう」というぎりぎりの結論を出してみました。

たとえ小さく基礎的な研究であっても、私たちにとって価値のあるテーマに地道に取り組んでいけば、どこかで社会とのつながりが出てくる。それをきっかけとして、新たな展開が生まれる。そういった一つの事例としてご覧ください。

福岡 まどか(教授/社会学・人間学系) 編著

『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』

(めこん 2022 年)

Fukuoka, Madoka (ed.) *Ramayana Theater in Contemporary Southeast Asia*, Jenny Stanford Publishing, 2023.

皆さんはヒンドゥーの神々の名前を知っていますか？シヴァ神やブラフマー神は日本でも比較的知られていると思います。吉祥天(ラクシュミー)や弁財天(サラスヴァティー)などの女神も日本に根づいてきました。インドではそうした神々の物語から神の転生である英雄の物語に至る多くの物語群が発展し、それらは他地域に広まっていきました。この本で考察した古代インドの叙事詩ラーマーヤナは、ヒンドゥー三大神の一人ヴィシュヌ神の転生である英雄ラーマ王子が、さらわれた妃シーターを取り戻すべく猿の軍勢の助けを借りて魔王ラーヴァナと戦う、という内容です。

この叙事詩は冒険、戦い、ロマンスなどの要素が満載の魅力的物語です。マハーバーラタとともに古代インド二大叙事詩として広く知られています。ラーマーヤナはスタジオジブリのアニメ「天空の城ラピュタ」の題材としても知られており、二大叙事詩の登場人物名は最近の日本ではゲームの題材としてゲーム好きの若者たちに広く知られているようです。

神話が神々の物語であるのに対して、叙事詩は英雄たち特に神

の転生である英雄たちが活躍する物語であり、神々の世界から人間界により近づいたものとして位置づけられます。王位継承争い、武将の高潔な魂、道徳的規範などを描く人間ドラマの部分は人間の世界に近づいた叙事詩の特徴を示しており、一方で登場人物たちの超能力、運命、不思議な武器などが描かれる部分は神々の転生である英雄たちの物語の特徴を示しています。猿をはじめとする動物や魔物など人間以外の存在も登場します。こうした特徴のゆえにこの叙事詩は、絵画、文学作品などに限らず演劇上演の中でさかんに演じられてきました。

ラーマーヤナは9世紀頃から東南アジアに伝わり、多様な分野で独自の発展を遂げ伝承されてきました。この本は、東南アジアの演劇の中でラーマーヤナが多様なかたちで演じられている現状を考察したものです。この叙事詩を題材として、今日の理想的リーダー像を追求する舞踊劇や、伝統的ジェンダー規範に疑問を呈する演劇などが創作されています。古代叙事詩であっても、人々が現代社会を生きるための指針になってきたと言えるでしょう。

この本の新しい試みは委嘱創作作品が収録されていることです。口絵頁には現在活躍中のアーティスト3人による新作が収録されています。本文中のQRコードから作品映像クリップにアクセスが可能です。ぜひ文章とともに作品も味わってみてください。まだ新しい試みですが、今後は同様の形式の書籍も増えていくでしょう。またパンデミックの状況下で映像作品化される演劇上演について考える機会にもなると思います。2023年には英語版も出版されました。こちらも楽しんでいただけたら嬉しいです。

三浦 麻子（教授／行動学系）

『なるほど！心理学研究法』

（北大路書房 2017 年）

本書は、私が監修した『心理学ベーシック』シリーズ（全 5 巻）の第 1 巻です。このシリーズでは、心理学をただ学ぶだけではなく自らの手で研究することを志す方々を主たる想定読者として、心理学の標準的な研究手法とその礎となる基礎知識について、なるべく平易かつ的確に解説しています。中でもこの第 1 巻は、心理学研究を志すすべての方を対象に、鮮度の高い事例や普遍的なハウツーを盛り込みながら、心理学の多様な研究法のいずれにも共通する基盤的知識を解説しています。

「心理学研究法」は、国家資格「公認心理師」取得に際する必修科目なので、これを講じるテキストは他にもたくさんありますが、本書で特に力を入れたのは、科学における研究不正が社会的にも大きな問題となっていることや、心理学研究の再現可能性の低さが指摘されている現状をふまえて、研究倫理に関するトピックに全 13 章中の 3 章を割いて手厚く扱ったところです。これは類書と比較して破格の量であり詳細さです。これは、初学者のうちから、研究者として「なすべきこと」と「やってはいけないこと」をきちんと知ってほしい、という強い思いを込めたものです。

本書は、実証に基づく科学としての心理学が「なるほど!」と理解できて、もっと研究したくなる入門書だと自負しています。研究法の本というと「マニュアル」めいたものを想像されるかもしれま

せんが、そういう要素も盛り込みつつも、じっくりと読んでいただける内容を目指しました。そのために、事例やハウツーをただ網羅するのではなく、「なぜそうすべきか」を理解できるように呈示することを重視しています。18歳の時の私と同じように、心理学を研究することを志して人間科学部に入学された方々はもちろんのこと、社会学や教育学など隣接領域に関心を持つ方々にとっても、人間科学の中でも心理学とはどのような位置づけにある学問なのかを知る最初の1冊として好適だと思います。手に取ってみていただけると嬉しいです。

なお、本シリーズの残り4巻は「実験法」「調査法」「観察法」「面接法」というラインアップで、心理学の主要な研究法に1つずつ焦点を当てて詳説しています。目次や参考文献一覧などを掲載したサポートサイト(<http://bit.ly/2NjfHjZ>)を開設しているので、皆さんの関心に合わせてこちらも是非ご一読下さい。

三谷 はるよ（准教授／社会学・人間学系）

『ACE サバイバー

—子ども期の逆境に苦しむ人々—』

（筑摩書房 2023 年）

ACE（エース）とは、Adverse Childhood Experiences の頭字語であり、「子ども期の逆境体験」と訳されます。具体的には、18 歳になるまでに受けた虐待・ネグレクトや、家庭の機能不全（家族の依存症、精神疾患、DV 等）に曝される体験のことをいいます。

本書では、しんどい子ども時代を生き抜いた人々があゆむ人生についての科学的事実をお伝えしています。この四半世紀の間に発展を遂げてきた ACE 研究の知見を、疫学、精神医学、神経科学、心理学、ソーシャルワーク研究などを分野横断的に俯瞰し、解説しています。さらに、日本での全国 2 万人アンケートや当事者への生活史調査をもとに、ACE サバイバーが被っている累積的な不利の実態を示し、今後の社会のありかたについて提言しています。

本書の核心部分は、ACE が、成人後の心身の疾患、失業や貧困、社会的孤立や子育ての困難に至るまで、長期的に悪影響をもたらすという点です。つまり、「たまたま生を受けた家族の境遇（生まれ）の格差が、生涯にわたる多面的な格差につながっている」ということです。

こうした事実は、目を向けたくないものです。そして、これまで十分に目を向けられてこなかった事実です。しかし本書は、あえてここに切り込みました。それは、社会学者として大規模データを分析すればするほど、ACE サバイバーに過剰なまでの不利が押しつけられていることに驚愕し、「この事実は社会問題である」という認識を強めたからです。

ACE をめぐる事実を多くの人に知ってほしい。しかし日本語で書かれた読みやすい一般書がない。ならば私が書こう、という半ば使命感、半ば思い上がりが筆を進めました。専門的知識の質は落とさないようにしつつ、できるだけ平易に書くことを心がけ、忙しい人向けに、読み飛ばしができるよう重要箇所を太字にしました。

逆境に曝されている子どもたち／かつて曝されていた大人たちの存在を無視することをやめましょう。子どもがどんな家庭に生まれても、健やかな健康やライフチャンスを獲得できるように、そしてACEを予防できるように、この社会でやれることはたくさんあります。本書を、子どもに関わるすべての方、ACE サバイバー当事者、その支援者の方に読んでいただきたいです。また、人間科学を志す人科生にも、是非この本を読んでいただき、自分の社会の中での立ち位置を考えながら、これからの社会づくりについて一緒に考えてもらえれば嬉しいです。

村上 靖彦（教授／社会学・人間学系）

『摘便とお花見 看護の語りの現象学』

（医学書院 2013 年）

しばしば不条理な仕方で襲ってくる病や障がいをして、生と死のはざまにある患者と家族を、その生活において支える看護師という職業に私は魅力を感じ続けている。

本書は病院あるいは自宅でのがん患者の看取り、あるいは小児がんの子どもの看取りを通して、もう一度具体的な場面から人間とは何かを問う試みであった。

以下、本書の「はじめに」から引用する。

「看護師さんの語りはおもしろい。

看護師は、私が身につけることのできない技能を持ち、私が決し得ることのないであろう経験を重ねている。しかもこのような技能と経験は、同じ人間として地続きのものでもある。それゆえ看護師の語りを聴くとき、私は自分の経験が拡張されるように感じる。しかもそのような語りを文字に起こしてから分析すると、表面のストーリーの背後に、さらに複雑で多様な事象が隠れている。本書はそのような驚きを描いている。

看護師は患者と医師のあいだに立つ。つまり病や障害を生きる患者と、科学と技術を代表する医師とのあいだに立つ。複雑な人間関係や医療制度の板挟みになりながら、生と死が露出する場面に、立ち会い続ける。緊迫した職場であり、人間の可能性の限界を指し示

している。それゆえ人間の行為とはいかなるものかを考えるために、重要な示唆を与えてくれるのだ。

本書は四人の看護師さんにインタビューをとり、その逐語録を、現象学という方法論を用いて分析した。内訳は、小児科から訪問看護に移った方、透析室から訪問看護に移った方、がん看護専門看護師、小児がん病棟の看護師である。そして付章で、現象学の方法論の説明を行った。

これから一人ひとりの語りを分析することで、それぞれの看護行為とその背景がどのように組み立てられているのかを明らかにしていきたい。ここで取り上げた実践に、「自分と同じところがある」と共感する看護師さんもいるであろうし、「私とは違う」という人もいるであろう。ともあれこの「一人ひとりの語りの分析」という点が、本書のポイントとなる。裏返すと、類似点と交じり合う形で、その人にしかない特異な経験が生じている。経験と行為は、過去と集団に由来する習慣性のなかで準備されつつも、そのつど取り替えがきかない個別的なものとして生じる。本書ではこの個別的なものに〈意味〉を見出すために、個別の経験の〈構造〉を取り出すということをおねらった。」

(本書「はじめに」より引用)

森田 邦久（教授／社会学・人間学系）

『科学哲学講義』

（筑摩書房 2012 年）

科学哲学の入門的な本です。科学哲学というのは、文字通り科学について哲学する分野です。科学哲学には一般論と個別論があつて、一般論というのは、分野に関係なく科学という営み全体にかかわる哲学的問題を、個別論というのは、生物学や物理学といった各分野特有の哲学的問題を扱う学問です。私自身は、一般論と物理学の哲学が専門です。本書で取り上げているのは、科学哲学の一般論が主です。では、科学にはいったいどのような哲学的問題があるというのでしょうか。

帰納的推論という、個々の事例から一般的な規則を導き出す推論は、科学では頻繁に使われています。たとえば、十分な数の金属に実際に電流を流してみても電流がよく通るならば、そこから「すべての金属は電流をよく通す」という規則を導き出すような推論が帰納的推論です（もちろん、実際の科学ではそこまで単純な推論をしないですが、基本的にはこのような形です）。しかし、帰納的推論が論理的に妥当な推論である～つまり、前提が正しいと結論も正しい～とは言えません（少なくとも簡単には言えません）。それはなぜでしょうか？そして、本当にそうなのだとしたら、帰納的推論で得た結論はどのようにして正当化されるのでしょうか（そもそも正当化可能なのでしょうか）？また、科学的な探求において「ある現象の原因とは何か」は重要な問いです。しかし「原因」とは正確に

は为什么呢？そもそもこの世界に「因果関係」などという関係は実在しているのでしょうか？本書では、こういった問いに加え、私たちが「科学」と呼んでいる営みはいったいどういう営みなのか、科学理論が要請する直接観測できない実体（原子や素粒子、ブラックホールなど）は本当に存在すると言えるのか、などといった問いについて考えていきます。

このような問いは、実際に厳密に考えてみると簡単に答えは出てきません。しかし、私たちの生活に科学が強く根付いている以上、このような問いを一度は真剣に考えてみることは価値があることでしょう。そして、帰納的推論や原因の探求は、専門的な科学においてだけではなく、日常生活でも行っているわけですから、これらの問いを考えることは、日常生活においても重要になります。是非一度、本書を手にとって科学哲学の世界を味わってみてください。

藤田 政博 編著

※分担執筆 綿村 英一郎（准教授／行動学系）

『法と心理学』

（法律文化社 2013 年）

本の内容

本書の構成は、「法と心理学」というテーマの定義から始まり、刑事場面・民事場面におけるさまざまな側面を実験や調査例により実証的に検討するというものである。以下、推薦者（綿村）が分担執筆した第9章「量刑と賠償額の判断」について取り上げる。本章の前節で論じる「量刑判断」とは、有罪が確定した被告人に対してどのような刑罰を科すべきかという判断である。基本的に、そのコンセプトは「悪行に相応の報いを与えるべきだ」という応報性が重視される。ただしその応報性は、裁く側の心理の中では意図せずはたらいっており、あれこれと理屈をつけて量刑を決めたように自覚していてもその内実は悪行の大きさでしか決まっていない。要は後づけである。後節の「賠償額の判断」では、米国の懲罰的賠償(Punitive Damages)について論じている。訴訟社会の米国では、日本人には理解しがたいような理由によって“法外な”懲罰的賠償が請求されるケースもある（例、マクドナルド・コーヒー事件）。懲罰的賠償の判断は、加害者への金銭的制裁を科すことで同様の被害を抑止する目的であるが、これは量刑判断とも一部共通すると考えられる。

推薦理由

「権利」や「責任」といった概念に対する意識が相対的に高い欧米において、法と心理学という研究分野は既に 40 年以上もの歴史がある。一方、日本においては 2009 年に施行された裁判員裁判まではさほど注目されてこなかった。本書は、心理学の視座から「法」について考察した、日本では初の書籍である。内容は本格的ではあるが表現はきわめて平易で、法律家やジャーナリストに限らず、初学者でもさらりと読むことができる（一般的に、法律関係の書籍といえば、専門用語が多く、主述関係を把握できかねるような長い文章が多いが、本書はそうではない）。また、テーマも民事から刑事まで幅広く扱っているため、法律全体に対しての教養を深めることができる。フィクションの世界と表現される法の世界に対して、実証性と客観性を武器とする心理学がどう切り込むのか、チャレンジな書籍として読むと興味深さが一層増すであろう。

「私の一冊」
人間科学研究科教員が薦める本

「自著を語る」
人間科学研究科教員が著した本

シリーズ人間科学

未来共創センター活動紹介

—シリーズ 人間科学—

『シリーズ人間科学』

(大阪大学出版会 2018 年～)

「人間科学とは何ですか?」、「人間科学部は何を学ぶところですか?」

人間科学部に入学してこられた皆さんにとっても、この疑問にすぐに答えることは難しいと思います。これらの疑問は、人間科学部が大阪大学に創設された 1972 年以來、常に投げかけられてきたものです。

私たちの人間科学部・大学院人間科学研究科では、心理学、社会学、教育学を中心に、哲学、人類学、地域研究、生理学、脳科学などの文系から理系の幅広い学問分野が単独で、あるいは交じり合いながら、研究活動が続けてきました。そのテーマは、「人間はどのように生まれ、育ち、死ぬのか」、「人間はどのように共に生きるのか」、「人と人が営む社会とは何か」など、人の暮らしにかかわることです。これらのテーマに取り組むために、文理融合や学際性の視点を大事にしながら、人々の暮らしの現場に寄り添い、課題を発見し、解決を目指すことを心掛けてきました。

このように多年にわたって人の暮らしにかかわることをテーマに研究が続けてきても、「人間科学とは何か」という問いにすぐに答えることができないほど、『人間科学』は簡単にとらえられないものです。だからこそ、私たちは一人ひとりが専門性を深めると同時に、他の学問分野の方法論、考え方をも取り入れることで、人の心、身体、暮らし、社会を探究しながら、それぞれが「私の人間科学」を作り上げることを目

指している、と言い換えても良いと思います。さらに、私たちの人間科学部・研究科では、多様な学問領域が関わり合って新しい学問領域である『共生学』を創設し、新たな展開を始めました。

「シリーズ人間科学」は「食べる」「助ける」「育つ」「老いる」「争う」「遊ぶ」などの動詞で著わされる言葉を書名とするシリーズです。これらの動詞は人の暮らし、社会での営みそのものであると同時に、それぞれの言葉をキーワードとして実に多様な視点から考え、取り組むことができる研究テーマでもあります。「人間科学」そのものです。「シリーズ人間科学」の最初の巻として 2018 年 3 月に発刊された第 1 巻『食べる』の目次に目を通すだけでも、その多様な視点とその面白さを感じ取っていただけたと思います。

「シリーズ人間科学」の執筆陣は、人間科学部・研究科の教員やここで学んだ人たちです。執筆する研究者はそれぞれの視座から、本のタイトルとなっている『動詞』に挑戦し、自分なりの考えを提示しています。しかも、大学生や一般社会人だけでなく、高校生にも読んでもらえる「わかりやすさ」も追求しました。各章を担当した執筆陣は原稿を互いに読み合いますので、交じり合い、新たな出会いを経験し、それらは「私の人間科学」の構築にも役立つはずです。

「シリーズ人間科学」は、読者である人間科学部の 1 年生と私たちの交流の場でもあります。この交流が皆さんを刺激し、皆さん一人ひとりが「私の人間科学」を創造するのに役立つと思います。

紹介：中道 正之（名誉教授）

「シリーズ人間科学」編集委員会・初代委員長

『シリーズ人間科学』第一巻「食べる」

(大阪大学出版会 2018 年)

一つ、考えてみて欲しい。今日この時までには、口に入れ、飲み込み、食べてきたものは、一体、どんなものであり、それらを、いつ、どのようにして、誰と食べてきたのだろうか。

われわれ人間は、太古の祖先の時代から、「食べる」がゆえに生存できる生き物であり、そして、「食べる」を通じて、その社会や文化、歴史も作り上げてきた存在である。ヒトは新生児として世に生まれた時には、自分自身の力だけでは、食べることにすら思うようにはできない。哺乳と離乳のプロセスの中で、親や養育者に食べさせてもらいながら、成長する。ある食べ物は好きになるが、また、別のものは嫌いになったりと、好き嫌いを持つようになる。そして、毎日の生活の中での「食べる」を通じて、他者と触れ合う機会が増えていく。時には、人間関係を築き上げるきっかけとして、また、ある時には、お互いへの贈り物として。我々の命を支えるはずの「食べる」は、さまざまな病気の要因を生み出すこともある。さらに、「食べる」には、根源的に動物と人とを分けるための文化の色合いや作法も含まれてくる。ヒトという動物である我々が、人・人間という文化・社会的な存在として生きるための線引きを与える事物とも、「食べる」は密に関連を持つ。

グローバル化が進行する世界では、人々の食べ物は多様になり、その地方や国々での伝統的な食生活は急速に変貌しつつある。日本でも数十

年前からですら、食の様相は大きく変わっている。「食べる」は個人での事柄であると同時に、社会や文化においても考えるべきことが多々あるだろう。そして、未来の社会を生きていくには、食を取り巻く社会の変遷や課題とは否応なく関わりを持たざるをえなくなっていくだろう。

本書は、「食べる」に関するさまざまな知見や見方をコンパクトにまとめたものである。「食べる」ということについて、全く異なる切り口から迫るさまざまな学問分野がそれぞれの手法や観点からアプローチできること、そして、やはり、その断面は全く異なる様相であることを示した好例とも言えるのではなかろうか。しかしながら、一見すると異なるアプローチであっても、共通する問題意識が根底にあることにも気づく。編集者として本書を通読しながら、「世界は広い。自分の視野や視点はまだまだ狭い。」と感じた。読者はどう感じるであろうか。一つの事柄・現象を見つめ、深く探究することは良い。一方、一つの分野や見方から、広く周りを見渡しつつ、関係の糸を手繰り、考えを拡げるのも楽しい。まずは一読して欲しい。そして、時を経て、もう一度読み返してみていただきたい。読者の学びのステージとともに、本書の言説の奥にある知識・イメージへの理解や見方の色合い、そして、それらからの発想も変わっていくことを期待する。

紹介：八十島 安伸（教授／行動学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会

第一巻「食べる」編集責任者

『シリーズ人間科学』第二巻「助ける」

(大阪大学出版会 2019 年)

少子高齢、過疎、災害の頻発、子どもの貧困などさまざまな難題を抱える現在の社会にあって、同時代的に、さらには世代を超えて、誰もが人間としての尊厳を持ち、支え合い、さまざまな困難に共に立ち向かえるレジリエントな共生社会の構築が望まれている。そこでは、「助ける／助けられる」という関係性と、その関係性の外で「助かった」という経験への理解も必要だ。さらには、「助けられない／助からない」ことへの心配りも忘れてはならない。共生社会の構築と「助ける」ことをめぐる思索には、さまざまな「場」での経験の積み重ねと分野を超えた知が必要であろう。

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科では、2016年に「共生学科目・共生学系」と「未来共創センター」を設置、2017年には新たな共創知を生み出す仕組みとしてOOS（大阪大学オムニサイト）を始動させた。OOSは、共生社会を創造していくための産官社学連携の仕組みである。学内外のセミナーやイベントのあらゆる（オムニ）「場」（サイト）、企業・財団・社团・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」（サイト）で協働実践をする。組織、人、知の壁を越えた「助け合い」という共通価値を創出（Creating Shared Values）し、共生社会の実現への貢献を目指している。

さて、本書のテーマである「助ける」という行為は、人だけでなく、

いのちあるものすべてが、誕生から死までの生涯を生き抜くために不可欠な行為であり、極めて日常的な行為でもある。人は一人では生きていけないことは自明であり、このことは、すべてのいのちあるものにも当てはまる。一方、「助けない」行為も、戦争、紛争、さまざまな競技から多様な場面での競争まで、極めて日常的な行為でもある。本書は、共生学系に所属し、未来共創センターのOOSを推進する二人の編者と、人間科学研究科に所属する研究者が「助ける」を多方面から捉えようとしたものである。

本書を通じ、大学生や一般社会人の読者に、人間科学が抱合する広範で、多様な学問分野の視点から、「助ける」のような日常的な行為を顧みることの面白さを実感していただきたいと願っている。若い世代から、人類の諸困難に共感し、その解決にコミットする人材、アントレプレナーシップを併せ持つ人材が育つことを期待する。

本シリーズ第二巻の『助ける』は、多くの方々との出会いと協働作業、ご教示、ご協力、すなわち「助ける」があって成り立ちえた。そのすべての皆様方に、感謝の意をお伝えしたい。

紹介：渥美 公秀（教授／共生学系）

稲場 圭信（教授／共生学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会

第二巻「助ける」編集責任者

『シリーズ人間科学』第三巻「感じる」

(大阪大学出版会 2019 年)

人工知能 (AI) やロボットの開発が急ピッチで進められている。その発展は私たちの生活を豊かにする反面、いま人間が行っている仕事の多くが近い将来 AI に奪われてしまうという予測もなされている。長い間、サイエンス・フィクション (SF) の話であったことが、突如として現実味を帯びてきた。

未来の世界は恐ろしいのか、それともバラ色なのか。みなさんはどう考えるだろうか。イメージする未来の姿には、その人の持つ「人間観」が色濃く反映されている。

シリーズ人間科学の第3巻は、「感じる」をめぐる11章からなる。なぜ「感じる」なのか。その意図を説明しておきたい。

1972年に大阪大学人間科学部が作られたとき、これからは「人間」の時代がくると期待されていた。1950年代に始まった戦後の高度経済成長が、オイルショックによって終焉を迎えようとする時期である。急速な工業化に伴い、環境破壊が起これ、公害などの社会問題も生まれてきた。経済的には豊かになったが、さてこれからどうするか。そういった問いに答えるために、人間科学部は創立され、多くの学生を引きつけるとともに、多くの人材が輩出した。

それからおよそ50年が経ち、私たちを取り巻く環境は大きく変わった。一番の違いは、「人間は特別だ」という特権意識が揺らいできたこ

とだろう。20 世紀であれば、産業機械はいかに優れていても、気の利いた道具の域を出なかった。人間と機械を対比させることはあっても、その根底には「人間は比類のない存在である」という暗黙の安心感があった。

しかし、現在はどうだろう。自分に似て、しかも自分より優れた部分もある AI やロボットが登場し、驚くほどのスピードで進化を遂げている。「人間とは何か」という古典的なテーマが、「私たちはこれから何をして生きていけばいいか」という現実的な問いと初めて結びついた。それを解くカギを握るのが「感じる」だという見立てによって、この巻は編集された。

本書は3部構成になっている。第1部「一人で感じる」では、個人の内部で生じるさまざまな現象を取り上げた。第2部「人と人の間で感じる」では、社会的関係におけるいろいろな現象を解説した。第3部「地球規模で感じる」では、個々の集団を超えた社会と社会の関係にまつわる問題を論じた。

本書を手にとったら、難しいことは抜きにして、まずは自分で素直に感じるところからスタートしてみよう。自分をセンサーにして、さまざまな研究領域の現状を感じとってみよう。それが人間科学を始める第一歩である。

紹介：入戸野 宏（教授／行動学系）

綿村 英一郎（准教授／行動学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会

第三巻「感じる」編集責任者

『シリーズ人間科学』第四巻「学ぶ・教える」 (大阪大学出版会 2020 年)

「学ぶ」「教える」という動詞から、多くの人は学校の光景を連想するかもしれない。もちろん現代社会において、学校は、主たる学び、教えるための組織である。しかし「学ぶ」「教える」という場を学校に限定するのは、その意味を狭く捉え過ぎである。

人は、この世に誕生したとき、他者の支えなしには生きていけない。そして周囲の人々や、環境、社会からさまざまなものを徐々に吸収し、成長してゆく。これは、社会化とよばれるプロセスである。社会化の過程では、多くの失敗を重ねるだろうし、その失敗から学習することもある。人の一生は、「学ぶ」ことだといってよい。

一方で、人生の先達者として、子どもや後輩に、知識や技能を伝える、という場面も多々ある。あるいは、より日常的に、年齢や立場を超えて、ちょっとした情報を伝えたり、「こうしたほうがいいのでは」という提案を示したりすることもある。これらは「教える」行為の範疇に含まれる。しかし「教える」過程で、うまく伝わらなかったなどと反省し「学ぶ」こともある。「学ぶ」と「教える」は、そういう意味で表裏一体の関係にある。

シリーズ人間科学第四巻は、人間科学という視点から「学ぶ」「教える」を鳥瞰したとき、一般に「学ぶ」「教える」を扱う既存の教育学の枠組みをはるかに超えた、多様なアプローチや見方が存在することを示

そうと企図している。そこで取られるアプローチは、文系・理系の枠組みには収まらない。実験、フィールドワーク、ドキュメント分析、統計分析、比較研究や臨床的アプローチなど、人間科学の問いを明らかにする方法は多数ある。どの方法が適切かは、問いの内容に依存する。ただ、既存の特定の枠組みや方法論に収まることなく、さまざまな視点から人間活動を見つめれば、人の本性に迫る可能性が飛躍的に高まるであろう。

「学ぶ」「教える」という単語から、かくも多様な切り口が存在するのだ、という学問体系の豊饒さが伝われば、本書の試みは成功したといえる。人間科学を学ぶ学生の皆さんには、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

紹介：中澤 渉（教授／教育学系）（出版時）

野村 晴夫（教授／教育学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会

第四巻「学ぶ・教える」編集責任者

『シリーズ人間科学』第五巻「病む」

(大阪大学出版会 2020 年)

本書は、さまざまな分野や角度から「病む」ことについて考察した論集である。よほど特殊な人でない限り、「病」の経験をしていない人はいないし、また、人間に限らず動物も、あるいは植物もさまざまな「病」を経験する。したがって、「病む」ことは、生き物にとっての普遍的なテーマの一つであると言ってもよい。ところが、「病」や「病むこと」や「病人」の扱いは、動物と人において異なるだけでなく、人の集団（文化、民族、歴史）によっても実にさまざまであり、それが個人の生にとって、また集団や社会の生にとって果たす役割も、驚くほど多様である。

「病む」ことには、さまざまな意味が付与され、また、その「病」の周辺には、さまざまな社会制度や職業が発生する。われわれの日常生活を見回すだけでも、どれほど多くの産業、科学、文化、職種、習慣が「病」に関係しているか、見通すことができないくらいである。本書は、行動学、医学、臨床心理学、福祉学、社会学、人類学などの領域で「病」がどのように意味づけられ、それに対してどんなアプローチがとられるかが平易に理解できるようになっている。われわれは、たとえば、「がん」とか「糖尿病」とか、「エイズ」とか「新型肺炎」といった個別の病気の知識はたくさんもっているように考えている。また、そうした病気が「病気」であることが自明であるようにも考えている。しかし、そもそも「病気」とは何であり、何が病気と呼ばれるべき状態なのか、という

ことについては、実際には専門家も含めて多くの人が答えられないのである。

2018年10月から、人間科学研究科は、『グローバル時代の健康と教育』というユネスコチェア（ユネスコが指定する特定のテーマについての国際的拠点）を運営している。世界中の健康と病について考える機会がここには豊富にある。その中で浮かび上がるのは、多様な健康と病気の観念であり、またそれらがそれぞれの社会の中で果たす役割の多様さである。大阪大学人間科学部・人間科学研究科で学ぶみなさんが、そうした素朴な疑問と現実の多様さ複雑さ、そして面白さを感じて、今後の勉強に活かしてもらえることを期待する。

本書の制作に携わっていただいた、著者のみなさん、シリーズ全体の編集者のみなさん、出版社のみなさん、また、出版を支援していただいた多くの方々への感謝を込めて、紹介の文としたい。

紹介：山中 浩司（教授／社会学系）
「シリーズ人間科学」編集委員会
第五巻「病む」編集責任者

『シリーズ人間科学』第六巻「越える・超える」 (大阪大学出版会 2021 年)

人生、なかなか思い通りにいかないなあ…。

皆さんも、これまでにいちどくらいはこう思ってため息をついたことがあるのではないだろうか。

確かに、私たちが暮らすこの世界には^{まだ}儘ならない（自分の思い通りにならない）ことが多い。いつ、どこに、誰を親として生まれてくるか。いつ、どこで、どのような怪我をしたり、どのような病気にかかることになるのか。どのように老いて、いつ、どこで、どのように死ぬのか。あらかじめ自分の人生の行き道について知っている人は誰一人いない。家族や友人をはじめとする周囲の人々との関係だって、思い通りになることばかりではない。学校や塾、部活動での成績だってそう。また、自然災害はもとより、いま猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症の感染拡大についても、簡単にどうにかなるものでもない。この世界には、儘ならない出来事やものごとがけっこうたくさんある。むろん、こうした出来事やものごとには何とか対処しようと、人知と人力を最大限に活かして事態をコントロールするべく、人間はさまざまな生活の技法や科学技術を開発してきたし、いまこの時も日進月歩の勢いでたゆまず開発を続けている。それでもなお、「想定外」の出来事やものごとは、残念ながら尽きない…。

このような世界で、人間はいかにして〈人間らしく〉、あるいは他の

誰でもない、かけがえのない〈私らしく〉、充実した生（生命、生活、人生）を営むことができるのか。本書には、この問いに応答することを研究主題とする学問分野の研究者 12 名が寄稿している。

この世界は儘ならないことばかりだなんて考えていると気が滅入る、充実した人生を求めて悩んだりせず、気楽になあなあで生きたっていいじゃないか、と思う人もいるだろう。もちろん、それもあり、である。そう考えること自体に異を唱えるつもりは毛頭ない。

だが、もし、本書の各章で取り上げられている主題一覧（帯文より）を見て、少しでもおもしろそうだと思ったり、何だそれは？ と不思議に思ったりしたら、ぜひご一読いただきたい。

夢分析でこころの葛藤を超える？ ト라우マから回復するとは？
臨床心理士はただ聞いているだけ？ ポジティブな「老い」とは？
呪術で病気を治す？ 宗教を信じる仕組みとは？
被災記憶をどう継承する？ 「賭ける」ことで現在を超える？
「わかっている」を超えたら世界が広がる？

そうすれば、もしかしたら、この儘^{まま}ならない世界で、それなりに生き生きと生きるために、境界を「越えて」協働し、既存の知を「超えて」いく何らかのヒントが見出せるかもしれない。

紹介：岡部 美香（教授／教育学系）

「シリーズ人間科学」編集委員会

第六巻「越える・超える」編集責任者

『シリーズ 人間科学』第七巻「争う」

(大阪大学出版会 2022 年)

「争い」はないほうがよい。これはたしかだ。もし争いが発生すると、それを解決しようとしたり、争いそのものが生じること回避しようとするのも、当然のことだ。一人の人間として、できるだけ争いはしたくないと思うのも、当たり前のことだ。しかし、人間は争いから完全に自由でいられるだろうか。争いがまったくない世界というのはありえるだろうか。そもそも、人間を含むすべての生き物は、「生存競争」の結果生き残り、現在のすがたに進化してきたのではなかったか。ここでは、争いを広く考えてみよう。競争、葛藤、軋轢、闘争、戦い、等々。これらはすべて争いであると考えることができる。争いは、回避すべき、あるいは解決すべき課題である。しかし、見方を変えれば、争いは進歩や発展の原動力でもある。争いがなかったら、人間の社会と世界は、今のかたちをとっていなかっただろう。

人間は「争う動物である」と言えるのではないか。過去1万年ほどのあいだに人口は爆発的に増加し、南極を除く地球の全域に生息域を広げた。そして、高度に発達した国家と社会を形成したのである。その結果人間は、国家と社会の枠組みの中で、および広く地球環境の中で、多種多様な争いを経験している。それは、食と性をめぐる単なる「生存競争」という次元にとどまらない、

複雑な様相を呈している。現代世界は、争いに満ちているといっても過言ではない。

争いは人間科学の主要な研究テーマのひとつになるべき課題である。本書には、このように考えた人間科学研究科教員 9 名の論考が収録されている。執筆者の専門は、教育学、心理学、文化人類学、動物行動学、共生学等、さまざまである。対象となっている地域も、日本だけでなく、東南アジアやオセアニアが含まれている。さらに、人間同士だけでなく、人間と自然との間など、さまざまなレベルの、さまざまな主体間の争いが描かれている。

本書を読んで、人間科学的な争いへのアプローチと、争いをめぐる問題の広がりと深さを実感し、新しい視点を獲得していただけることを願っている。

紹介：栗本 英世（名誉教授）
「シリーズ人間科学」第七巻『争う』編者

『シリーズ 人間科学』第八巻「住む・棲む」 (大阪大学出版会 2022 年)

人間が自然的条件のなかで生きつづけるかぎり、何らかの住居をつくり、何らかの場所に馴染み、住む・棲むということは不可欠だ。よくいわれるように、生物としての人間は、自然のなかできわめて脆弱である。いかなる自然のなかにおかれても、人間はそのままでは風雪雨からも降り注ぐ日光からも、あるいは外敵（猛獣であれ、ウイルスであれ）からも身を守ることはできない。衣服とともに住居がないということは、定住民であれ、遊牧民であれありえない。ある場所に、ある環境に棲み着くことは、心理的にも必要である。

近代以前の人間は、その場その場の環境に強く依存しながら住居を形成し、棲み方を工夫してきた。ほとんどが木・藁・紙でできた日本の伝統的住居、大理石を積み上げた地中海からヨーロッパ文明を覆う住居群、繊細な北方ゴシック建築。砂漠では土や泥で、熱帯雨林では草と木で、それぞれの仕方で環境に適応した住居をつくり、それ自身がその共同体の「社会体制」を反映するものであっただろう。

だが二〇世紀以降、近代建築の祖とされるル・コルビュジェの作品がその代表とされるように、住居は決定的に非場所的・均質的なものとなっている。もちろんそれは、鉄材、ガラス、コンクリートを自由にあつかいうるテクノロジー的進歩の産物であるし、産業資本主義の進展にともなって、多くの労働者が都市に集約して住まざ

るをえなくなった帰結でもある。疑似ル・コルビュジェ的な、あるいはガラスを全面にだしたミース・ファン・デル・ローエ風味の建築物が、グローバル資本主義の進展、伝統的共同体の解体、ネオリベラル化にともなう核家族化や個人主義化とともに、上海でもドバイでも、ナイジェリアでも跳梁闊歩している。これは現代的な必然でもあり、また多様性の時代とされるにもかかわらず、こうした「全世界均質化」は、生活の細部におけるまでわれわれの「生」を「似たようなもの」として、しかも「他者」との分断において規定してしまう。

こうした「住居」は、さらにインターネットによる情報の流通やさまざまな移民化が速度を増して進展する将来、どのようになるのだろうか。あるいは、人新世の時代において、自然との調和や宇宙への居住が課題となるときに、それはどのようなものになりうるのだろうか。そして住む・棲むということが無意識に規定する自分自身の生、他者との関係、共同体のあり方は、住居の転変からどのように照らしだされるのだろうか。

本書は社会学、心理学、人類学、哲学思想の諸領域から以上の問いへの手立てを探るものである。もちろん以上の問いに「正解」はない。だが近代を経たポスト近代を生きなければならないわれわれは、誰もが上記の問いに向きあわなければならないはずである。

紹介： 檜垣 立哉（名誉教授）

「シリーズ人間科学」第八巻「住む・棲む」編集責任者

「私の一冊」
—人間科学研究科教員が薦める本—

「自著を語る」
—人間科学研究科教員が著した本—

—シリーズ人間科学—

—未来共創センター活動紹介—

—未来共創センター紹介—

—未来共創センター活動紹介—

本センターは社会と大学とのつなぎ目となり、共に未来を創っていくことをめざしています。学生のみなさんは、本センターが企画・運営する公開講座、セミナー、まなびのカフェ等の活動に参加することで、研究成果の社会への還元方法や、コミュニケーション力・対話力の向上、およびプロジェクトの企画・運営能力等の実践的能力を身に付けることが期待できます。本センターの多様な活動を、高校生や地域住民の方々に対しても発信し、高大連携と社学連携の発展に貢献します。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

◇ 人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学研究科の教員が研究成果を発信するセミナーや講義を開催しています。



◇ まなびのカフェ

参加者とともに語りあう、交流型の学びの場です。教員が外に行くだけでなく、外部のパートナーが大学に来て共にまなぶ場を、気軽なカフェとして実施します。

◇ 「シリーズ人間科学」の発刊

研究内容を分かりやすく発信する本として、これまでに、「食べる」、「助ける」、「感じる」、「学ぶ・教える」、「病む」、「越える・超える」、「争う」、「住む・棲む」が発刊されています。

◇ ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたジャーナルを、年1回発刊します

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

◇ 研究会の運営

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを決めた研究会も実施しており、2023年度は「学際研究で挑む『月経』」をテーマに多分野の教員・学生が議論を重ね、その成果を特集論文として発信しています。



◇ 学生プロジェクト

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的イベント、活動に対して経費を援助して、その実現を支援することを目的とするものです。活動の必要に応じて5万円を上限として支援します。

◇ 大阪大学オムニサイト協定（OOS 協定）

産官社学連携により、人間科学研究科の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

◇ IMPACT オープンプロジェクト

人間科学研究科の教員が中心となり、研究科内の異なる分野及び他部局、そして学外諸団体との協働を推進するプロジェクトを実施します。学内に多様な「結び目」をつくり、実践的な研究・教育活動を通じて、「共創知」の創出に貢献します。



人間科学研究科教員が薦める「私の一冊」2024

2024年3月31日発行

編集・発行 大阪大学大学院人間科学研究科

附属未来共創センター

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1番2号

制 作 株式会社 一心社

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-15



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター